

国士館大学地理学教室 創設50周年記念誌

国士館大学文学部地理・環境専攻
【国士館大学地理学教室】

目次

1. 専攻主任あいさつ（地理学教室の50年とこれから）	1
2. 地理学教室での思い出	2
国土舘大学在職30年（長島弘道）	2
地理学専攻の公文書（野口泰生）	5
3. 地理学教室 略史	7
4. 歴代の教員	10
1) 専任教員	10
2) 非常勤講師	10
3) 兼担教授	13
4) 特別客員教授	13
5) 特任教授	13
5. 役職者	14
1) 学部三役	14
(1) 学部長	14
(2) 教務主任	14
(3) 学生主任	14
2) 専攻主任	14
3) 学科主任	14
4) 大学院人文科学研究科	14
(1) 委員長	14
6. 地理学専攻／地理・環境専攻の目的	15
7. カリキュラムの変遷	17
8. 歴代の野外実習	23
1) 1年生の野外実習	23
2) 2年生の野外実習	25
3) 3年生の野外実習	30
4) 4年生の野外実習	34
9. 入学者数・在籍学生数・卒業者数	35
10. 大学院人文科学研究科地理・地域論コース在籍学生数・修了生数	36
11. 歴代の地理学専攻／地理・環境専攻の学生主事・学生担当職員	37

1 2. 地理学教室スタッフによる出版物	38
1) Newsletter	38
2) 新入生用「地理学教室のしおり」	40
3) 「卒業論文の手引き」	41
4) 専攻パンフレット「地理学教室のご案内」	42
5) 『地理学野外調査入門－多摩丘陵の地理学的見方・考え方－』	43
1 3. 日本地理教育学会 全国地理学専攻生卒業論文発表大会発表者	45
1 4. 社会科教育のための地理ワークショップ	46
1 5. 国土館大学地理学会 学会誌	49
1) 地理学会誌	49
2) 国土館大学地理学報告	50
1 6. 国土館大学地理学会講演・研究発表会	56
1 7. 文学部紀要（地理学関連論文）一覧	68
1 8. 卒業生からのメッセージ	73
編集後記		80

1. 専攻主任あいさつ

地理学教室の 50 年とこれから

地理・環境専攻主任 磯谷 達宏

はじめに、これまで教室の創設や運営に関わってくださった皆様、そしてこの教室で共に学び共に歴史を作ってきたくださった全ての皆様に深謝いたします。1966 年度（昭和 41 年度）の文学部創設と同時に史学地理学科「地理学専攻」として設立されて以来、本地理学教室は 2016 年度（平成 28 年度）で創立 50 周年の節目を迎えました。2001 年度（平成 13 年度）に大学院人文科学研究科「地理・地域論コース」が設立されてからも、15 年を数えています。本教室が創設された 1966 年は、今日では日本の高度経済成長期が後半に入った頃と位置づけられているようです。その後、地球規模の環境問題が重要課題として共有されるようになり、2004 年度（平成 16 年度）からはカリキュラムの大幅な変更に伴い地理学専攻の名称が「地理・環境専攻」と変更され、今日に至っています。この間、多くの卒業生たちが巣立ち、地理学教室での学びを生かして社会のさまざまな分野で活躍してくれています。

以下では、簡単な現状認識にもとづいて、これからの地理学教室のあり方について少し展望してみたいと思います。昨今では、少子高齢化や地域振興などへの対策が、地理学も関係する重要課題として広く認められています。持続可能性（サステナビリティ）という語もキーワードの一つとなっています。また、情報化社会の進展に伴い、学問の世界でも多くのデータを取り扱う実証科学が重視されるようになり、地理学関連では GIS がそのための有効な手法としてますます注目されています。一方で、文学部では 2017 年度（平成 29 年度）から学科の枠組みを基本とした「学科・コース制」を導入することになり、学部教育は「地理・環境コース」として新たな時代を迎えることになりました。2019 年度（平成 31 年度）からは文学部全体としてのさらなる改編を行うことも検討されています。

新たな学科体制の下、昨今の地理学教室では、このような文学部再編の時代をチャンスとして捉え、上述のような社会や学問の時代の要請にも応えられるような新たな教育体系の構築を模索しています。幸い高校の地歴科においては近く「地理総合」という科目が必修化されることになりましたが、この科目では高校でも GIS を用いた防災や ESD（持続可能な開発のための教育）等を取り扱うことになっています。そこで、将来の地理・環境コースでは、カリキュラムの再編により防災に関する科目群を拡充するとともに、これまで以上に GIS や持続可能な地域づくりに関する科目群も充実させ、結果としてコンサルタント会社等の技術者や教員・公務員、さらには地域づくりのリーダーとして活躍できる人材をこれまで以上に多く輩出していきたいと計画しているところです。

2. 地理学教室での思い出

国土舘大学在職 30 年

長 島 弘 道

私は、1978年4月、国土舘大学教養部に助教授として着任、1982年に文学部史学地理学科地理学専攻に移籍、2008年3月に定年退職しました。在職30年になります。その間、教員組合書記長、文学部長、大学院人文科学研究科委員長など専攻以外の役職に係る機会があり、大学について幅広く考えるようになったこと、他の専門分野の人との出会いなど貴重な体験をすることができました。地理学専攻は、私にとっていわばホームグラウンドであり、多様な体験をする機会がありました。例えば、大崎晃先生、学生それに学生主事の協力も得て実施した沼津市の商店街調査、国史学専攻の大川清教授から声をかけられて実施した栃木県益子町史・窯業編の調査など。ここでは、地理巡検・卒論面接、日本地理学会春季学術大会、国際交流セミナーをキーワードにして教室の動きの一端を振り返ってみたいと思います。

地理巡検・卒論面接

多くの大学の地理学専攻では、地理巡検・地理学野外実習は必修科目として開設されています。国土舘大学でも、かつては1年から4年まで各学年、学生全員参加方式で地理巡検が行われていました。あるとき3年の地理巡検で、学生が宿舍・室内の一部を損傷したことで、管理責任者から厳しく注意されたことがありました。それが契機になり、1984年からは3年次の地理巡検（現、地理学野外実習C）は、各ゼミ単位で行い、期間中は禁酒にしました。長島ゼミでは、学生は自分でテーマを設定し、現地で調査を行い、400字詰め原稿用紙30枚のレポートを作成することを基本方針としました（写真1）。巡検の成果を、各ゼミの代表が国土舘大学地理学会で報告するようになったのは1988年からです。なお、4年地理巡検は1986年に廃止されました。



写真1. 3年生地理巡検・浜松（1991年10月）

卒業論文の面接は、かつてはひとりの学生に対して全教員という方式で行われていましたが、自分だけが厳しくされたのではないかとの学生の不満の声が聞こえてきたので公開にしました（1987年）。完成度の高い卒業論文の製本保存は、1986年からです。日本地理教育学会主催の地理学専攻学生卒業論文発表会への国土館大学からの最初の参加は1979年でした。1984年以降は1986年を除いて毎年参加できるようになりました。

こうしてみると、地理学専攻における1980年代は、多くの試みがなされ、ひとつの変革の時代として捉えられるのではないのでしょうか。その結果として今日の地理学野外実習C、各ゼミ代表の研究発表、卒業論文公開口頭試験など、いわば地理学専攻独自の教育の仕組みが出来あがってきたように思われます。ちなみに、「NEWSLETTER」第1号発行も1988年です。

日本地理学会春季学術大会

日本地理学会は、春の大会を東京およびその周辺の大学、秋の大会を地方の大学で開催しています。国土館大学でも、1990年代に校舎のリニューアル、中央図書館の建設など学内が整備されたので、1998年3月に春季学術大会の会場校を引き受けました（写真2）。

全国規模の学会の開催は、大学にとってもあまり例のないことでしたので教務課を中心として多くの部署に協力して頂きました。学内で学会が開催されることは、学生にとっても地理学の現場を知ることになり、よい体験になったのではないかと考えています。

写真2. 日本地理学会春季学術大会
(1998年3月)

日本の地理学界のなかで最も大規模な学会である日本地理学会の大会が、1998年の春に国土館大学で開催された。新装なった図書館をバックに。



フィリピン・デラサール大学との国際交流セミナー

2001年、本学（地理学専攻主体）とフィリピン・デラサール大学との交流セミナー計画が、(財)日本国際教育協会の「国際大学交流セミナー」として採用になりました。この事業は、日本で開催されるセミナーに参加する海外の学生・教員の渡航費・宿泊費を補助するものです。せっかくの機会なので、地理学専攻の学生にも海外研修の機会を設けてはと教室で検討、計画書を大学に提出、承認を得ることができました。そこで参加者を募集したところ10名の応募がありました。かくして9月に磯谷達宏先生と長島、学生10名でフィリピンを訪問することになりました（7日間）。内容は室内での講義と現地見学。たまたま同大学に留学していた奥山友希乃さんも参加し、交流の円滑化に貢献しました。10月にはデラサール大学の教員（2名）・学生（11名）が来日しました（14日間）。デラサール大学との交流セミナーは2007年9月にも実施、長谷川均先生と長島、学生10名、院生1名がフィリピンを訪問（7日間、写真3）。フィールドワークでは、ピナツボ火山噴火による災害地域も見学しました。



写真 3. デラサール大学との交流セミナー
タール火山（311m）山頂にて
（2007年9月）

地理・環境専攻学生への期待

今日の社会では、課題設定能力やプレゼンテーションの方法・技術などが、以前にもまして求められるようになってきました。地理学野外実習や卒論の作成・発表などを通してそうした力を身につけてほしいと思います。

国土館大学は、海外の51大学と交流協定を結んでいます。こうしたかかわりを活用して、ひとりでも多くの学生が海外での研修、自分の目で地域を見る訓練をされんことを期待しています。

（国土館大学名誉教授）

地理学専攻の公文書

野口泰生

国士舘大学に文学部が設置されて 50 年を迎える。地理学専攻は設立当初から存在する 7 専攻のひとつで、50 年という歳月は短いようで長いと思う。この間に、地理学専攻の担当教員、カリキュラム、研究室、設備などは大きく様変わりし、幸か不幸か、当時の状況はほとんど何も残っていない。特に地理学教室の機能は、昔とは比較にならないほど濃密となり、教育や研究の中身に大きく影響している。このような状況はぜひ大事に育てていって欲しいと、定年退職者として切に思う次第である。

さて、地理学専攻創設 50 年史の編纂というから、ぜひ訴えたいことがある。昔、寺田寅彦が随筆集の中でこんなことを述べていた。「普段使っているこの茶碗も箸も、100 年も経てば、非常に貴重で、大切なものになる」。かつて 3 年生の地理実習で長野県須坂市に出かけたが、現地には江戸時代のりっぱな商家が残っていて、一般公開されていた。びっくりしたのは、そこで生活をしてきた家族の様々な日常の生活用品が、まるで今も使われているもののように展示されていたことである。私は個人的な趣味で、よく地方の民族資料館に立ち寄るが、だいたいどこも似たり寄ったりの展示である。しかし、ここでは子どもの玩具など、まるで展示用にとっておいたかと思うように生き生きと並べられていた。

地理学専攻創設 50 年では、まだ記念にとっておくようなものは無いかも知れない。しかし、設立当初どのような先生方が関わってこられたか、ほっておけば忘れ去られてしまう。数年前、海外巡検の際、台湾の中国文化大学でお世話になった Dr.Hsueh(ㄒㄨㄟ)先生が東京に立ち寄られた。その際、Dr.Hsueh は台湾の地理学分野でよく知られているという日本人地理学者の話をされた。この日本人は台湾に滞在中、台湾の都市地理に大変興味をもち、いくつかの論文を現地の雑誌に残された。それらが彼を有名にしているのだという。彼の名前は富田芳郎というのだが、その名前を聞いたとき、ギョッとした。国士舘大学地理学専攻にいらっしゃった初代の先生の名前と同じなのだ。ただ、その先生は地質学者で、都市景観とは無縁のように思えた。ところが、国士舘大学文学部紀要を丹念に見ていくと、その先生の名前で台湾の都市景観に関する **Review** が出てきた。まさしく、この方に違いないと思った。

設立当初、地理学専攻にいられた山口俊策先生も秩父の自然史博物館の展示物に今も名前が載っているし、このほか、国士舘大学教務課の教員調書を見ると、数多くの著名な地理学者が地理学専攻に関わりをもっていたことがわかる。

地理学教室に長らくあった岩石標本も、今となっては誰がどのように地理学専攻へ寄贈したのかわからないが、鶴川校舎の世田谷移転に伴って秩父の自然史博物館へ寄贈された。この膨大な標本は、博物館の研究員が興味をもっているいろいろ調査し、数本の論文にまとめられた。整理の経過は地理学教室の Web に「脇水鐵五郎コレクションの全容」として掲載さ

れている。

1980～82年にかけて、私はミシガン大学に滞在した。あいにく、ミシガン大学の地理学科は1982年に閉鎖されてしまったが、滞在中、大学院博士課程で、氷河学をやっていた学生がいた。彼の存在は知っていたが、話す機会は無かった。その彼が先日メールをくれた。用件は、「閉鎖されたミシガン大学地理学科の資料を私が集めてもっていると聞いたが、AAGのシンポジウムで使いたいの、ぜひ見せて欲しい」というのだ。34年も前の資料である。

それよりも、いったい、どうして私がそのような資料をもっていると知ったのか。Dr. G. Martin というアメリカ地理学史の専門家がいて、彼がハワイ大学に立ち寄った際、閉鎖されたミシガン大学地理学科の話を持ち話でやった記憶があるが、その彼から私が資料をもっていると聞いたらしい。すべて30年も前の話である。

確かに、実家の書庫にはミシガン大学地理学科閉鎖に関する教室会議や学部教授会資料、新聞の切り抜きなど、いろいろあった。通し番号をつけると370頁にもなった。これを長谷川先生の助けを借りて、メール転送した（メールは便利だ）。先方は、お礼もさることながら、資料の膨大さに驚き、これだけの文献は見たことがないと言っていた。

私がこれらの資料を保存しておいたこと、また、すぐに見つけられたことは偶然であったが、次のようなことは言えると思う。「私は昔からあまりものを捨てないタチだ」と言うよりも、ものを簡単に捨てない家庭に育ったという方が正しいかも知れない。古い家の縁側の隅に昔のものが積まれていて、そこにネズミの白骨死体があったのを覚えている。

しかし、ここで言いたいのは、捨てられない性癖のことではない。世の中はFactで満ち満ちている。そのおびただしい量のFactの中から、主張すべきTruthを見つけ出さなければならない。それが我々の仕事でもある。そのためには、まずFactを集める必要がある。日本人が不得手の公文書館である。学問をする人は特に要注意であるが、これはあらゆる分野の人に言えることかも知れない。

(国士舘大学名誉教授)

3. 地理学教室 略史

年度	主な出来事
1966	文学部開設（3 学科 7 専攻）※1969 年に初等教育専攻が開設（3 学科 8 専攻体制へ） 地理学専攻開設（4 月） 専任教員は 5 名：内田寛一・富田芳郎・大橋与一・山本正一・山口俊策
1970	第一次カリキュラム改革
1978	国土館大学地理学会設立準備委員会の発足（4 月） 国土館大学地理学会発足（5 月）
1979	国土館大学地理学会『国土館大学地理学会誌』第 1 号発刊（3 月）
1983	『卒業論文の手引き』（初版）の発行 ※改訂：1984、1986、1989、1995、1998、2001、2004、2008、2012、2016
1985	文学部初のパソコン導入（地理学教室が管理）
1986	卒業論文 製本保存の開始
1987	卒業論文口頭試験を公開化
1988	第二次カリキュラム改革…新設・廃止・名称変更 全体の約 4 割 Newsletter の発行開始（2017 年 1 月までに 65 号を発行） 長島弘道教授 学外派遣研究員としてカナダへ留学（1988 年度） 地理学野外実習の成果報告・研究発表会の開始（12 月）
1989	NEC98 7 台体制に
1990	新入生用『教室のしおり』の配布を開始（2009 年度まで）
1991	地理情報処理室（ガラス張りの部屋）を設置
1992	「ひまわり」「ノア」の受信設備が設置される
1994	リモートセンシング解析用システムが設置される（私立大学研究設備整備助成金） GIS ソフトの整備も進む 大型計算機 FACOM M380 端末装置、ワークステーション SUN7 が配備される
1995	教養部廃止にともなう学部分属が始まる 第三次カリキュラム改革 長島弘道教授が文学部長に就任（10 月） 個人研究室の整備が行われる（インターネット専用回線も整備される） 国土館大学地理学会 教員の各専門部会への参画 『国土館大学地理学報告』の定期刊行化
1997	専任教員の増員（旧教養部から）
1998	日本地理学会春季学術大会の開催（3 月） 専任教員の増員（旧教養部から）

- 専攻のパンフレットを作成する（以降、5回の改訂を重ねる）
 専攻のホームページの立ち上げ
- 1999 専攻のホームページの拡充（今月の地理写真、今月の衛星画像など：7月）
- 2000 鶴川キャンパス9号館3階に地理実習室が開設される。
 カリキュラム改訂へ向けた議論が始まる。
- 2001 大学院人文科学研究科地理・地域論系 修士課程の開設（4月）
 海外協定校との国際交流を始める（2016年度までに合計5回実施）
 社会科教員のための地理ワークショップの開催（7月）
 （2016年度までに合計16回開催）
 卒業論文 製本保存論文リストのweb公開が始まる
- 2003 大学院人文科学研究科地理・地域論系 博士課程の開設（4月）
 大学院地理学分野の単位互換協定施行（4月）
 長島弘道教授が大学院人文科学研究科委員長に就任（4月）
 鶴川キャンパスの地理実習室が、14号館4階に変わる。
- 2004 専攻名称の変更（地理学専攻から地理・環境専攻へ）（4月）
 第四次カリキュラム改革（半期セメスター制の導入）
 磯谷達宏助教授 育児休業（同年9月～2005年3月）
- 2005 長島弘道教授が大学院人文科学研究科委員長に再任
- 2006 野外での教育研究活動における安全管理のための指針を制定（7月）
 野外調査安全マニュアルの策定
- 2008 世田谷キャンパスでの一貫教育が始まる（梅ヶ丘校舎が完成）。
 これにともない、地理実習室が10号館2階に開設される（4月）
 鶴川キャンパス14号館4階の地理実習室は閉鎖（4月）
 長島弘道元教授が名誉教授に（6月）
 鶴川キャンパス（当時）に所蔵されていた岩石標本（脇水鐵五郎氏のコレクション）
 の埼玉県自然史博物館による調査・整理が始まる（2010年度まで）
 GIS 学術士・専門 GIS 学術士の認定校になる
- 2009 卒業論文 製本保存論文のPDF公開（後に2001年度卒業生の分まで公開に）
- 2011 経済地理学会大会の開催（5月）
 地域調査士・専門地域調査士の認定校になる
- 2013 国士舘大学地理学教室編『地理学野外調査入門 ー多摩丘陵の地理学的見方・考え方ー』国際文献社、を刊行（5月）
 長谷川均教授 学外派遣研究員として法政大学へ（2013年度）
- 2014 日本地理学会春季学術大会の開催（3月）
- 2015 加藤幸治教授 学外派遣研究員としてスイス・チューリッヒ大学へ留学（2015年度）

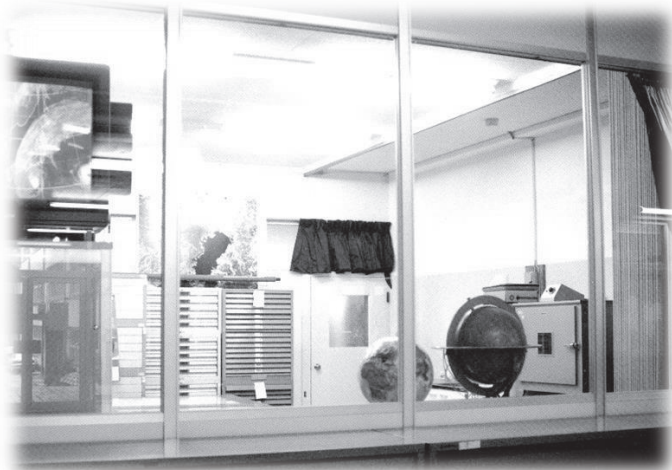
2016 長谷川均教授が文学部長に就任（4月）

野口泰生元教授が名誉教授に（6月）

文学部創設 50 周年記念事業への参加（10月）

地理学教室創設 50 周年記念事業（講演会・パーティー）（12月）

資料：国士舘大学文学部・同創設 30 周年記念行事実行委員会編 1996.『国士舘大学文学部創設 30 年史』、国士舘大学文学部・同創設 40 周年記念行事実行委員会編 2006.『国士舘大学文学部創設 40 年記念誌』、国士舘大学文学部・同創設 50 周年記念事業実行委員会編 2016.『国士舘大学文学部創設 50 年記念誌』、国士舘大学地理学教室『Newsletter』（各号）、地理学教室ホームページ記事、各年度の卒業アルバムなどより作成。



←地理情報処理室（1991年）
地理学教室といえばガラス張りの地理情報処理室。開放的な雰囲気の中で研究・教育活動が行われてきました。アメダスの画面に見入る学生も多いです。

（1991 年度卒業アルバムより転載）

階段教室：10204 教室（右・下）→卒業論文公開口頭試験、学位記授与式の会場としても利用されてきました。写真（右）は、2012 年度の卒論発表の様子。写真（下）は、2015 年度の学位記授与式の様子。

（地理学教室ホームページ「専攻の写真帖」より転載）



4. 歴代の教員

1) 専任教員

- ・内田寛一：1966年度～1969年度
- ・富田芳郎：1966年度～1974年度
- ・大橋与一：1966年度～1977年度
- ・山本正一：1966年度～1982年度
- ・山口俊策：1966年度～1968年度
- ・浅沼 操：1969年度～1975年度
- ・岩田孝三：1970年度～1981年度
- ・大崎 晃：1975年度～1990年度
- ・浅井得一：1978年度～1985年度
- ・長島弘道：1982年度～2007年度 ※1978年度～1981年度 教養部
- ・太田晃瞬：1983年度～1990年度
- ・野口泰生：1983年度～2015年度
- ・長谷川均：1988年度～
- ・内田順文：1991年度～
- ・瀬戸玲子：1991年度～2000年度
- ・岡島 建：1997年度～ ※1993年度～1995年度 教養部,
1996年度 文学部（共通）
- ・磯谷達宏：1998年度～
- ・加藤幸治：2001年度～
- ・宮地忠幸：2008年度～

2) 非常勤講師

- ・福井英一郎（1966年度～1969年度？）
- ・山口鎌次（1966年度～1970年度？）
- ・浅沼 操（1968年度）
- ・野村正七（1968年度～1970年度、1972年度）
- ・浅井得一（1969年度～1977年度）
- ・西沢利衛（1970年度～1971年度）
- ・山辺功二（1972年度？～1983年度）

- ・ 吉田栞美 (1973 年度～2001 年度)
- ・ 武内常行 (1975 年度)
- ・ 太田晃瞬 (1976 年度～1979 年度、1981 年度～1982 年度)
- ・ 長島弘道 (1976 年度～1977 年度)
- ・ 田渕 洋 (1978 年度～1991 年度、1993 年度～2000 年度、2002 年度)
- ・ 渡部 晋 (1979 年度～1994 年度)
- ・ 長谷川均 (1985 年度～1987 年度)
- ・ 田村 均 (1986 年度)
- ・ 横山秀司 (1986 年度～1989 年度)
- ・ 上野和彦 (1987 年度～1990 年度)
- ・ 小倉 眞 (1988 年度～1994 年度)
- ・ 瀬戸玲子 (1988 年度～1990 年度)
- ・ 福島義和 (1988 年度～1991 年度、1994 年度～2005 年度)
- ・ 清水長生 (1990 年度～1991 年度)
- ・ 水尾藤久 (1990 年度～1999 年度)
- ・ 川上 誠 (1991 年度～1998 年度)
- ・ 許 衛東 (1991 年度～1993 年度)
- ・ 澤口晋一 (1992 年度～1995 年度)
- ・ 高木 正 (1992 年度～)
- ・ 水野一晴 (1992 年度～1996 年度)
- ・ 山口幸男 (1993 年度～1994 年度)
- ・ 長沢利明 (1994 年度～)
- ・ 片岡義晴 (1995 年度)
- ・ 田中恭子 (1995 年度)
- ・ 卜部勝彦 (1996 年度～1999 年度)
- ・ 川合元彦 (1996 年度～1998 年度)
- ・ 橋爪若子 (1996 年度～2003 年度)
- ・ 長谷川裕彦 (1996 年度、2001 年度～2014 年度)
- ・ 市川清士 (1997 年度～2000 年度)
- ・ 高野繁昭 (1997 年度～)
- ・ 助重雄久 (1999 年度～2000 年度)
- ・ 竹林和彦 (1999 年度～2005 年度)
- ・ 清水靖夫 (1999 年度～2006 年度)
- ・ 中村六郎 (2000 年度～2005 年度)
- ・ 三富正隆 (2000 年度～)

- ・品田光春 (2000 年度、2006 年度～)
- ・雪野 出 (2001 年度～2003 年度)
- ・矢ヶ崎典隆 (2001 年度～2003 年度) *大学院
- ・東郷正美 (2001 年度～2011 年度) *大学院
- ・中井達郎 (2003 年度～)
- ・本木弘悌 (2003 年度～2005 年度)
- ・吉永秀一郎 (2004 年度～2008 年度)
- ・谷口智雅 (2004 年度～2011 年度)
- ・佐々木明彦 (2004 年度～)
- ・井田仁康 (2004 年度～) *大学院
- ・沖津 進 (2004 年度、2005 年度～2015 年度) *大学院
- ・長岡總子 (2004 年度)
- ・末吉健治 (2006 年度～)
- ・保谷忠男 (2005 年度～2012 年度)
- ・両角政彦 (2006 年度～2007 年度)
- ・鈴木倫太郎 (2007 年度～2011 年度)
- ・竹崎嘉彦 (2007 年度)
- ・池田真志 (2008 年度)
- ・小堀 昇 (2008 年度～)
- ・長沼佐枝 (2008 年度～2013 年度)
- ・清水孝治 (2009 年度～2014 年度)
- ・三浦英樹 (2009 年度～2014 年度) *大学院 (2016 年度～)
- ・鈴木毅彦 (2011 年度～) *大学院
- ・大八木英夫 (2012 年度～)
- ・田中 圭 (2012 年度～)
- ・海津 優 (2013 年度～)
- ・中山大地 (2013 年度)
- ・小泉 諒 (2014 年度～2015 年度)
- ・梶山貴弘 (2015 年度～)
- ・加藤和暢 (2015 年度)
- ・前杢英明 (2015 年度～)
- ・伊藤修一 (2016 年度～)
- ・中村圭三 (2016 年度～)

3) 兼担教授

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ・山口俊策 (1969年度～1977年度) | ・北川善広 (1980年度～1987年度) |
| ・浮洲 実 (1974年度) | ・前田俊郎 (1980年度～1987年度) |
| ・加藤 茂 (1974年度～1977年度) | ・柴田英明 (1985年度～1989年度) |
| ・飯野丹次 (1975年度～1977年度) | ・小亀 淳 (1988年度～1991年度) |
| ・菊田征勇 (1975年度) | ・小川英文 (1990年度～1993年度) |
| ・金成英夫 (1976年度～1984年度) | ・市村 純 (1992年度～) |
| ・長島弘道 (1978年度～1981年度) | ・岡島 建 (1995年度) |

4) 特別客員教授

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ・大橋与一 (1978年度～1985年度) | ・岩田孝三 (1982年度～1984年度) |
| ・山口俊策 (1978年度～1979年度) | ・山本正一 (1983年度～1985年度) |

5) 特任教授

- ・浅井得一 (1986年度～1987年度)

5. 役職者

1) 学部三役

(1) 学部長

長島弘道 1995年10月07日～1998年03月31日

長谷川均 2016年04月01日～

(2) 教務主任

大崎 晃 1982年04月01日～1984年03月31日

野口泰生 2000年04月01日～2004年03月31日

岡島 建 2012年04月01日～2014年03月31日

(3) 学生主任

長島弘道 1989年04月20日～1994年03月31日

岡島 建 2010年04月01日～2012年03月31日

2) 専攻主任

1. 内田寛一 1969年度～1970年度

7. 瀬戸玲子 1994年度～1995年度

2. 岩田孝三 1971年度～1979年度

8. 野口泰生 1996年度～1999年度

3. 浅井得一 1980年度～1985年度

9. 長谷川均 2000年度～2005年度

4. 大崎 晃 1986年度～1990年度

10. 岡島 建 2006年度～2009年度

5. 長島弘道 1991年度

11. 内田順文 2010年度～2013年度

6. 野口泰生 1992年度～1993年度

12. 磯谷達宏 2014年度～

3) 学科主任 (史学地理学科主任)

1. 岡島 建 2015年10月1日～

4) 大学院人文科学研究科

(1) 委員長

長島弘道 2003年04月01日～2006年03月31日

6. 地理学専攻／地理・環境専攻の目的

1) 創設時の目的

1966年4月、文学部は現構成よりも一専攻（初等教育）少ない三学科七専攻で開設された。設置許可申請書に述べられた設置目的は、包括的、抽象的で、これら七専攻を置いた理由は特に明示されていない。後に文学部短中期将来構想委員会の意識調査報告書（1988年）が指摘するように、文学部の専攻分野には東洋的偏りがみられるが、七専攻の設置理由が、上記申請書の設置目的に記された「日本精神にもとづき」とか、開設祝典で柴田総長が語る「日本本位の大学」の建設、文学部開学式優秀所感論文集に唱われる「国家の文学」、あるいは大学受験資格に掲げられた「日本国籍を有し、両親共に日本人であること」などどのように関連していたのかは不明である。ただ、国士舘大学が当時の大学教育を憂え、独自の総合大学を目指そうとしていたことは当時の資料からも十分うかがえる。

七専攻の一つとして設置された地理学（専攻）は、もともと歴史学と対峙する学問として、自然科学や社会科学のなかで空間認識の分野を担当してきた。文学部開設当時の地理学専攻カリキュラムや教員構成をみると、系統地理学と地誌、自然地理学と人文地理学の諸科目が当初からバランスよく配置され、今日のカリキュラムの基礎がすでにできていた。このことは、社会に有為な人間教育という一般目標のほかに、社会科教員の養成という具体的な教育目標が視野の中に入れていたものと思われる。

2) 今日の（1990年代半ば）の教育理念

地理学専攻では、文学部短中期将来構想委員会への提出資料（1988年）や第二部会への提出資料「地理学専攻の将来構想」（1992年）などで、専攻の理念・目標を度々示してきた。それによれば、専攻では教育目標を単純に、「地理的素養を身につけさせる」ことに置いている。すなわち、我々を取りまく自然環境や人文環境を地理的空間として理解できる能力を養うことに置いている。言い替えば、空間的広がりの中に見られる諸事象の規則性、方向性、あるいは、特異性、例外性、広がり限界などについて理解を深め、その原因やメカニズムを検証し、これら地理的見方を通して社会の理解と発展に資することを目的とする。

3) 今日（2010年代）における教育研究上の目的

本専攻では、「環境を構成する空間的広がりの中に見られる諸事象・諸現象の特徴について把握して、その成立要因や構造を検証する能力を養い、地理的・地理学的な見方・考え方を通して社会の理解と発展に資する人材を育成すること」を目的としている。そのために、「学生に地理的素養や環境問題に対する問題意識を身につけさせる」ことを第一の目標としている。そして、それより先の具体的目標については、個々の学生が四年間の学習を通して自ら決められるよう、専攻として斬新かつ充実したカリキュラムを準備して対応してい

る。

4) 3つのポリシー

①入学受入の方針（アドミッションポリシー）

私たちが求める学生は、基本的には、地理学を学ぶ意欲をもちそのための基礎的な学力を養ってきた人である。

AO入試においては、とくに下記の何れかの項目に当てはまる人を募集してきた。

1. 地理や環境問題に関心があり、地理の成績が優秀である者
2. 地理、環境関係や語学関係の諸資格を持っている者
3. 生徒会活動・ボランティア活動・スポーツ等で一定の活躍をした者
4. 地域（郷土）や自然環境、環境問題、自らの見聞を広めるための旅行や野外活動に強い興味を持ち、自らもしくは自身を含むグループで企画した継続的な学習や旅行・野外活動などの経験を延べ7日以上有し、その成果を何らかのかたちで示すことのできる者

②教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

地理学を基軸におきながら、地理と環境を総合的に学ぶことができるよう、自然環境科目群・人間環境科目群・地域環境科目群・情報調査科目群・調査研究科目群というジャンルそれぞれに、基礎から応用まで多くの専門科目を設けて、四年間で幅広い専門知識を学ぶことのできる環境を整えるとともに、野外実習や卒業論文を必修科目とすることで、全ての学生に対し「地理学的な見方・考え方」の習得を求めている。また、専任教員の専門領域は地理学の広範な分野をバランスよく網羅しており、学生の力を有効に引き出すため、少人数できめの細かい指導を行っている。

③学位授与の方針（ディプロマポリシー）

上記の必修・選択科目群を含めて所定の単位を修め、四年間の学習やその結果としての「卒業論文」の作成、さらに卒業論文提出後に行う公開口述試験を通じ、次の能力を備えた学生に卒業を認定して学位を授与している。

1. 多様な地理学的知識や方法論を習得し、幅広い教養や総合的判断力を有している人。
2. さまざまな地理学的知識を活用する能力、多様な情報・データを収集し分析・表現する能力、論理的な思考力、問題解決力、コミュニケーション力を有している人。

※1)と2)は、『国士舘大学文学部創設 30 年史』p.127「(1) 地理学専攻の目的」から、3)は『国士舘大学文学部創設 50 周年記念誌』p.48「1. 地理・環境専攻の教育理念」から、それぞれ抜粋（一部加筆・改変）しています。

7. カリキュラムの変遷

第1表 地理学専攻カリキュラム（専門科目）の推移

	1966年度開設当時				1995年度(第二次改革)				1996年度(第三次改革後)			
	科目名	必修	選択	配当学年	科目名	必修	選択	配当学年	科目名	必修	選択	配当学年
系統地理	地形学		4	2	地形学		4	2	地形学		4	2
	地質学		4	2	第四紀学		4	3	第四紀学		4	3
	気候地理学		4	3	気候学		4	3	気候学		4	3
	生物地理学		4	3	生物地理学		4	3	生物地理学		4	3
					自然地理概説		4	1~2	自然地理概説		4	1
	地理学概説	4		2	人文地理概説	4		1~2	人文地理概説	4		1
	政治地理学		4	3								
	人口集落		4	3	都市地理学		4	3	都市地理学		4	3
	歴史地理学		4	3	歴史地理学		4	3	歴史地理学		4	3
経済地理学		4	4	経済地理学		4	3	経済地理学		4	3	
関連領域	国史概説		4	3	国史概説		4	2	国史概説		4	1
	東洋史概説		4	3	東洋史概説		4	2	東洋史概説		4	1
	西洋史概説		4	3	西洋史概説		4	2	西洋史概説		4	2
					民俗学研究		4	3	民俗学研究		4	3
					文化人類学研究		4	3	文化人類学研究		4	4
					資源管理論		4	3	資源管理論		4	3
					地域計画論		4	4	地域計画論		4	4
					環境アセスメント		4	4	環境アセスメント		4	4
									考古学概論		4	1~2
									歴史民俗学		4	3~4
								文化史概説		4	3~4	
地誌	日本地理		4	1	日本地誌		4	1	日本地誌		4	1
					首都圏地誌		4	2	首都圏地誌		4	1
	外国地理Ⅰ (ソビエト)		4	2	外国地誌 (発展途上地域)		4	3	外国地誌 (発展途上地域)		4	3
	外国地理Ⅱ (アジア)		4	3	外国地誌 (アジア)		4	2	外国地誌 (アジア)		4	2
	外国地理Ⅲ (欧州・アフリカ)		4	3	外国地誌 (ヨーロッパ)		4	3	外国地誌 (ヨーロッパ)		4	3
	外国地理Ⅳ (アメリカ)		4	4	外国地誌 (アメリカ)		4	3	外国地誌 (アメリカ)		4	3
外国地理Ⅴ (オセアニア・両極)		4	4	外国地誌 (環太平洋地域)		4	4	外国地誌 (環太平洋地域)		4	4	

情報解析・演習	地理学実習Ⅰ	2	1	地理実習	2	2	地理調査法	4	1			
	地理学実習Ⅱ	2	2									
	地理学実習Ⅰ	2	3	文献研究	4	3	文献研究	4	3			
	地理学実習Ⅱ	2	4									
	地図研究	4	3	地図学	4	3	地図学	4	1			
				地図製作法	4	4	地図製作法	4	3			
				測量学	4	3	測量学	4	3			
				測量実習	2	4	測量実習	4	4			
				計量地理入門	4	1	計量地理学	4	3			
				応用情報処理A	2	2	地理データ分析入門	2	2			
				応用情報処理B	2	2						
				情報学概論	4	3	統計情報学	4	3			
				リモートセンシング	4	4	リモートセンシング	4	3			
						空中写真判読	2	2				
						地理情報システム	4	4				
巡検・卒論	地理巡検	1×4	1~4	地理巡検Ⅰ	2	1	地理実習Ⅰ	2	1			
				地理巡検Ⅱ	2	2	地理実習Ⅱ	2	2			
				地理巡検Ⅲ	2	3	地理実習Ⅲ	2	3			
				課題研究Ⅰ	1	3	地理学演習Ⅰ	2	3			
				課題研究Ⅱ	2	4	地理学演習Ⅱ	2	4			
	卒業論文	4	4	卒業論文	8	4	卒業論文	8	4			
合計	単位/科目数	40	72	25	単位/科目数	55	86	41	単位/科目数	62	104	45

- 注. 1) 必修・選択の列は各科目の単位数を示す。また合計欄は必修・選択別の合計単位数と、総科目数を示す。
2) 1970年度入学生以降、外国地誌は7科目に増え、1976年度以降の入学生からそのうち4科目が選択必修となる。
3) 1988年度入学生以降、外国地誌は5科目に減り、そのうち3科目が選択必修に、また、日本地誌と首都圏地誌は1科目が選択必修となる。

資料：国土館大学文学部・同創設30周年記念行事実行委員会編 1996. 『国土館大学文学部創設30年史』 pp.129-130. より転載

第2表 2003年から始まった地理・環境専攻のカリキュラム

授業科目名		授業形態			必選単位		年次 (学年)	春秋 通集	授業内容の要旨
旧	新	講義	演習	実習	必修	選択			
現科目名 《45科目》	新科目名 《94科目193単位》								
自然地理概説	自然地理概説A	○			2		1	春	人間の生活環境のうち、自然環境について、その構成要素をシステム（生態系）として理解させる。生態系の中でエネルギーや物質（水など）が循環していることを理解させる。エネルギー収支・水収支という考え方の基礎を教える。
自然地理概説	自然地理概説B	○			2		1	秋	地球上の様々な自然環境のなかで、人々の暮らしを自然環境との関わりで説明する。
	気候環境と生活	○			2		2	春	卒論で頻繁に取り上げられてきたテーマを中心に、身近な気候現象の基礎を理解する。
	沖縄の自然環境	○			2		1・2	春	サンゴ礁の島々の自然や生い立ちを中心に、琉球列島と日本本土を比較しながら自然と人間の関わりを学ぶ。
地形学	東京の自然環境	○			2		1・2	春	関東平野と東京周辺の台地を例に、第四紀以降の自然環境の変遷と地形の成り立ちを探る。
地形学	地表環境の生い立ち	○			2		1・2	秋	山、平野、台地などの身の回りに見られる日本の地形の成り立ちを、第四紀の気候変動や地殻変動から読みとる。
気候学	地域の気候環境	○			2		3・4	春	日本を題材としてミクロから半球規模の気候現象を取り上げる。
気候学	グローバルな気候環境	○			2		3・4	秋	世界を題材として主にグローバルな気候現象を取り上げる。
生物地理学	日本の植生環境	○			2		3~4	春	日本の植生について、森林を中心に世界の植生との関連も含めて概観する。
生物地理学	地域の生態環境	○			2		3~4	秋	日本の草原や動物地理を概観し、さらに生物多様性の保全や緑地計画を取り上げる。
	日本の土壌環境	○			2		2~4	集	土壌地理とその調査方法を概観した後、野外での簡単な実習を行う。
第四紀学	第四紀の自然史	○			2		3・4	春	人類が誕生し進化した時代、現在の地形が形成され何回もの氷河時代が到来した最新の地質時代を学ぶ。
第四紀学	世界の地形	○			2		3・4	秋	世界各地に見られる地形の成因、形成時代、形成過程を日本の地形と比較しながら学ぶ。
	日本の水環境	○			2		3・4	春	北海道から琉球列島に至る降水現象と水循環の地域性を学ぶ。
	海洋と陸水の科学	○			2		3・4	秋	グローバルな視点から、蒸発・水蒸気量・降水・陸水を捉える。
人文地理概説	人文地理概説A	○			2		1	春	人口、食料、農業、農村、工業など、地理学で取り扱われている課題について概説する。
人文地理概説	人文地理概説B	○			2		1	秋	
歴史地理学	江戸東京の歴史地理	○			2		1・2	春	東国の片田舎であった江戸が、近代日本の中心都市東京となるまでの過程を、歴史地理的に考察する。
歴史地理学	歴史景観と環境	○			2		3・4	秋	歴史時代の日本の諸地域が、いかなる環境のもとに形成されたかを考察する。
経済地理学	経済と人間生活	○			2		1・2	春	経済発展と人間生活、経済活動と環境等を中心に今日的な課題を展開する。
	サービスの地理学	○			2		1・2	秋	第三次産業の立地や物流、情報・サービスの地域間フローを学び、そこから都市・地域間関係を考察する。

	交通の発達と環境	○	2	3・4	秋	地域内や地域間を結ぶ物流や交通の現代的問題について講義する。
	レクリエーションと環境	○	2	3・4	春	観光を中心に、地域を振興していくための計画論や、レクリエーションの活動空間との関連で地域を考察する。
都市地理学	都市空間と社会	○	2	3~4	秋	中心地理論・都市圏・都市システムなど、都市地理学の基礎概念について説明する。
都市地理学	都市空間と文化	○	2	3~4	秋	都市の風景や都市の意味など都市のもつ文化的側面について、人文主義的手法を用いて都市を解説する。
民俗学研究	民俗学	○	2	3・4	春	日本人の生活習俗・伝承文化を総合的にとらえて概説し、民俗学の方法論を学ぶ。
文化人類学研究	文化人類学	○	2	3・4	秋	人間と文化の関わりやその意味について、言語・社会構造・宗教儀礼・生態環境から考える。
外国地誌 (アジア)	環境と文化	○	2	3・4	春	人間の価値・知識・行為・習慣などの側面から、ますます多様化する文化や価値観の地域差を考察する。
資源管理論	地域資源の管理	○	2	3・4	春	水資源、森林資源、農村資源などの今日的課題とその対策について講義する。
資源管理論	農村資源の多面的利用 → 農村空間と社会	○	2	3・4	秋	農村資源の概念、種類、利用について、日本や諸外国の事例を取り上げて講義する。
	食と農の地理学(2012年度~)	○	2	2~4	春	日本および世界における食料問題、農業問題について講義する。
地域計画論	地域計画と景観	○	2	3・4	春	景観への関心の高まりの背景、景観保全とまちづくりについて事例をもとに検討する。
地域計画論	地域計画と住民参加	○	2	3・4	秋	地域計画における住民参加について、日本や欧米の現状と課題について解説する。
環境アセスメント	地球環境保全論	○	2	3・4	春	地球環境問題を地理学的、生態学的な視点で捉え、環境修復の具体的な課題、人類の将来について考える。
環境アセスメント	環境問題とアセスメント	○	2	3・4	秋	環境と公害、環境アセスメントなど、日本における開発と公害の歴史、環境アセスメント法などを学ぶ。
	自然保護と開発	○	2	1・2	秋	公共事業で失われる自然を保護することから始まった日本の自然保護運動を学び、地域経済に不可欠な新しい質の公共事業について考える。
外国地誌 (アメリカ)	社会環境と人間	○	2	3・4	秋	農村社会・都市社会などの社会環境が地域と人間に及ぼす影響について考察する。
	環境イメージ論	○	2	1・2	春	人の心と環境との結びつきを、心理学のイメージ理論から明らかにし、人にとって意味ある環境とは何かを考える。
外国地誌 (環太平洋地域)	旅の地理学	○	2	1・2	秋	風景論の歴史、風景の意味、風景の鑑賞法などについて考察する。旅行に関する基礎知識や旅の方法についても言及する。
	環境経済学	○	2	3・4	春	環境問題の発生メカニズム、経済活動(人間活動)と環境問題との関わりについて学び、対策について考える。
国史概説	日本史概説A	○	2	1	春	
国史概説	日本史概説B	○	2	1	秋	
東洋史概説	東洋史概説A	○	4	1	通	
東洋史概説	東洋史概説B	○	4	1	通	
西洋史概説	西洋史概説	○	4	2	通	
文化史概論	日本文化の歴史A	○	2	3・4	春	

文化史概論	人間環境科 目群	日本文化の歴史B	○	2	3・4	秋	
歴史民俗学		日本の民俗	○	2	3・4	春	
歴史民俗学		文化と伝承	○	2	3・4	秋	
		日本史の中の ジェンダー	○	2	3・4	春	
		国際交流の歴史	○	2	3・4	春	
		産業と流通の歴史	○	2	3・4	秋	
考古学		考古学A	○	2	1・2	春	
考古学	考古学B	○	2	1・2	秋		
日本地誌	地域環境科 目群	日本の地誌	○	2	1・2	秋	我が国を主として文化や風俗、自然環境の面から記述し、現代の日本社会を理解するために必要な地理的常識についても言及する。
日本地誌		日本の景観と文化	○	2	1・2	春	日本中のさまざまな地域を取り上げ、その独自の景観と、それを形成する要因となった文化との関わりについて考察する。
首都圏地誌		東京大都市圏	○	2	1・2	春	巨大都市東京を中心とする我が国最大の機能地域について、さまざまな視点から分析・考察する。
首都圏地誌		世田谷の地誌	○	2	3・4	春	本学の立地環境であり、東京の西郊にあたる世田谷の地誌について講義する。
外国地域 (アジア)		アジアの環境と 人間生活	○	2	1・2	春	アジア地域の自然環境・歴史・経済・文化等について、我が国との共通点と相違点を正しく理解する。
外国地誌 (ヨーロッパ)		ヨーロッパの環境 と人間生活	○	2	3・4	秋	ヨーロッパという、我が国とは異なる自然環境・歴史・文化・社会をもつ地域を正しく理解する。
外国地誌 (アメリカ)		北アメリカの環境 と人間生活	○	2	3・4	春	アングロアメリカ（アメリカ合衆国とカナダ）の自然環境と人間生活の地域性を学ぶ。
外国地誌 (発展途上地域)		熱帯・乾燥地域の 環境と人間生活	○	2	3・4	秋	ラテンアメリカや中東、アフリカなどから例を取り、開発途上地域の課題と地域性について学ぶ。
外国地誌 (環太平洋地域)		オセアニアの 環境と人間生活	○	2	3・4	春	環太平洋地域の自然環境と人間生活の地域性について学ぶ。
外国地誌 (発展途上地域)		世界の社会と経済	○	2	3・4	秋	世界中のさまざまな地域を取り上げ、その独自の経済構造と社会システムとのかかわりについて考察する。
外国地誌 (ヨーロッパ)	世界の民族と文化	○	2	1・2	春	世界中のさまざまな民族とその文化を取り上げ、民族文化相互間の関わり、および民族文化間での対立・紛争について考察する。	
地図学	情報調査科 目群	地図学	○	2	1・2	春	地表の表現法である地図の歴史、種類、表現方法、投影方法などを学ぶ。
地図学		地形図判読法	○	2	1・2	秋	地形図からさまざまな情報を読み取る方法を学ぶ。等高線の性質や地形図上での測定方法などを実習する。
地理調査法前期		地域調査法	○	2	1	春	人文地理学の研究を行う上で必要な基本的な作業や調査の方法を学ぶ。
地理調査法後期		自然環境調査法	○	2	1	秋	自然環境の調査に必要なさまざまな機械・器具類の使用法と、測定データのまとめ方を学ぶ。
地理データ 分析入門		環境データ分析法	○	2	1・2	春	数値地図データやアメダス（気候）データなどの分析方法、図化の方法、環境シミュレーションの基礎を学ぶ。
空中写真判読		空中写真判読	○	2	1・2	秋	空中写真を使って地域の情報を読み取る方法、地形調査や防災調査に必要な写真判読技術の取得を目指す。
統計情報学		統計情報学入門	○	2	3・4	春	コンピューターを用い、社会科学、自然科学の分析のために最低限必要な情報統計処理の方法について学ぶ。

統計情報学	統計情報学応用	○	2	3・4	秋	主として多変量解析を用いた、高度なデータ解析の方法について学ぶ。
計量地理学	社会調査とデータ分析法	○	2	3・4	春	聞き取り調査やアンケート調査などの社会調査の方法と、データ処理の実際について解説・実習する。
計量地理学	計量地理学	○	2	3・4	秋	現代地理学における計量的手法の意義と、計量的手法の実際の研究への適用法について学ぶ。
測量学	測量学1	○	2	3	秋	測量に関する基本的な知識と技術、歴史と現状、法令などに関して学ぶ。
測量学	測量学2	○	2	4	春	地図測量についての基本的な知識と技術を修得した上で、新しい技術に関して知識を深める。
測量学実習	測量実習1	○	1	3	秋	実習、演習を通じて測量学を実学として完成する。この科目は測量学2と、ペアで履修すること。
測量学実習	測量実習2	○	1	4	春	実習、演習を通じて測量学を実学として完成する。この科目は測量学1を履修済みの者が登録できる。
測量学実習	測量実習3	○	1	4	集	測量士補の資格付与に必要な現地実習を、集中して行う。
地図製作法	地図製作法	○	2	1・2	春	図式、縮尺などの基礎を学んだうえで、主題図、統計地図の作成を通して主題図作成の方法を学ぶ。
地図製作法	デジタルマップ製作法	○	2	1・2	秋	数値地図や既存の紙地図から、汎用グラフィックソフトを使ってデジタル主題図を作成する方法を学ぶ。
リモートセンシング	環境リモートセンシング	○	2	3	春	リモートセンシングの理論を学び、環境調査に利用する方法を学ぶ。
リモートセンシング	環境リモートセンシング応用	○	2	3	秋	リモートセンシングの実習を通して、解析の方法、利用方法を具体的に学ぶ。
地理情報システム	地理情報システム	○	2	3	春	GISの理論を学び、社会調査や環境調査に利用する方法を学ぶ。
地理情報システム	地理情報システム応用	○	2	3	秋	GISの実習を通して、解析の方法、利用方法を具体的に学ぶ。
文献研究	洋書講読	○	2	3・4	春	地理・環境関係の主に英文の論文を読みこなす能力を養う。大学院進学希望者などを対象とする。
地理実習Ⅰ	地理学野外実習A	○	2	1	集	1～3泊で行う必修の野外研究で、調査方法を実践的に学び、レポート、論文作成の手順を修得する。
地理実習Ⅱ	地理学野外実習B	○	2	2	集	
地理実習Ⅲ	地理学野外実習C	○	2	3	集	
地理学演習Ⅰ	地理学演習1	○	1	3	春	人文地理・自然地理の各分野の理論や調査法、研究法を学ぶことがこれらの授業の目的である。演習(ゼミ)形式で行い、レジュメのまとめ方や発表、討論の方法も学ぶ。
地理学演習Ⅰ	地理学演習2	○	1	3	秋	
地理学演習Ⅱ	地理学演習3	○	1	4	春	
地理学演習Ⅱ	地理学演習4	○	1	4	秋	
卒業論文	卒業論文	○	8	4		四年間の学習、研究の成果をまとめる。テーマの設定、論文の体裁、研究成果の内容などのすべてが評価の対象となる。

自然環境科目群	15科目30単位
人間環境科目群	39科目84単位
地域環境科目群	11科目22単位
情報調査科目群	22科目41単位
調査研究科目群	8科目18単位

資料：国土館大学文学部・同創設40周年記念行事実行委員会編 2006. 『国土館大学文学部創設40年記念誌』 pp.54-57を基に加筆修正。

8. 歴代の野外実習

1) 1年生の野外実習

授業科目名	年度	実施日	調査地域	調査内容
巡検	1983	5/25～26	東京都檜原村	山村の変容と課題
	1984	6/8～9	埼玉県三芳町三富新田	土地利用図作成・農村景観の観察
	1985	5/27～28	埼玉県三芳町三富新田	土地利用図作成・農村景観の観察
	1986	5/30～31	埼玉県三芳町三富新田	土地利用図作成・農村景観の観察
	1987	5/29～30	千葉県大網白里町	集落と土地利用
	1988	5/26～27	埼玉県三芳町三富新田	土地利用図作成・地理景観
	1989	5/25～26	埼玉県三芳町三富新田	土地利用の変遷・測定器材の利用
	1990	5/11～12	埼玉県三芳町三富新田	土地利用の変遷
	1991	5/23～24	埼玉県三芳町三富新田	土地利用の変遷
	1992	6/3～4	埼玉県皆野町	土地利用調査
	1993	5/17～18	埼玉県寄居町	街並みと土地利用調査
	1994	5/25～26	埼玉県寄居町	街並みと土地利用調査
	1995	5/29～30	埼玉県寄居町	空中写真による土地利用と地形判読
野外実習	1996	5/23～24	埼玉県入間市・飯能市・横瀬町・秩父市	関東平野西縁部農村地域の土地利用形態に関する基礎的な観察 秩父市街地の土地利用調査
	1997	5/22～23	東京都渋谷区	公園通り周辺と道玄坂周辺での商店街調査 渋谷駅周辺での土地利用調査
地理実習	1998	5/29～30	神奈川県横浜市	都市商店街の現状と動向についての店舗調査
	1999	5/28～29	神奈川県横浜市緑区	多摩丘陵南部における地形改変と景観変遷
	2000	5/30～31	東京都渋谷区渋谷駅周辺	渋谷駅周辺の土地利用調査と路上観察
	2001	5/30～31	東京都町田市鶴川地区・ 神奈川県川崎市麻生区新百合ヶ丘地区	鶴川・新百合ヶ丘地区の都市化・宅地化の展開
	2002	6/4～5	神奈川県横浜市緑区（十日市場～中山方面）	多摩丘陵南部における地形改変と景観・土地利用の変遷
	2003	6/3～4	神奈川県横浜市緑区	都市・横浜の光と陰
地理学野外実習A	2004	6/10～11	埼玉県川越市	小江戸川越をあるく
	2005	5/26～27	多摩丘陵北西部（東京都八王子市柚木地区）	多摩丘陵北西部における地形改変と土地利用の変遷
	2006	5/25～26	神奈川県横浜市緑区（十日市場～中山方面）	都市域の拡大と農村地域の変化・地形の人工改変と土地利用の変化
	2007	5/22～23	鶴川地区～新百合ヶ丘駅周辺・ 町田駅周辺・横浜市寺家ふるさと村	丘陵地の自然環境と人間生活 －映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く－
	2008	5/20～21	川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村	丘陵地の自然環境と人間生活 －映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く－
	2009	5/26～27	川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村	丘陵地の自然環境と人間生活 －映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く－
	2010	6/1～2	川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村	丘陵地の自然環境と人間生活 －映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く－
	2011	5/30～31	川崎市麻生区古沢地区・横浜市寺家ふるさと村	丘陵地の自然環境と人間生活 －映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く－

地理学 野外実習 A	2012	5/14~15	川崎市麻生区黒川地区	丘陵地の自然環境と人間生活 -映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く-
	2013	5/15~16	川崎市麻生区黒川地区	丘陵地の自然環境と人間生活 -映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く-
	2014	5/21~22	川崎市麻生区黒川地区	丘陵地の自然環境と人間生活 -映画「ラストサムライ」の間違いを読み解く-
	2015	5/20~21	川崎市麻生区黒川地区	丘陵地の自然環境と人間生活 -映画「となりのトトロ」に描かれた 丘陵地の自然環境と人間生活を参考に-
	2016	5/25~26	川崎市麻生区黒川地区	丘陵地の自然環境と人間生活 -映画「となりのトトロ」に描かれた 丘陵地の自然環境と人間生活を参考に-



←最近の1年生野外実習の様子
(2016年5月：川崎市麻生区)

2) 2年生の野外実習

授業科目名	年度	実施日	指導教員	調査地域	調査内容
巡検	1983	11/18～19		東京都青梅市	都市気温の観測とデータの整理
	1984	12/4～5		埼玉県秩父市	秩父盆地の小気候調査・荒川の地形
	1985	12/3～4		埼玉県熊谷市	小気候調査・農村調査
	1986	12/3～4		群馬県富岡市	小気候調査・農村調査
	1987	12/4～5		長野県諏訪・茅野	ヒートアイランドと農村調査
	1988	12/15～16		埼玉県秩父・皆野	都市気温と農村調査
	1989	12/14～15		長野県岡谷・諏訪	都市気温と農村聞き取り調査
	1990	12/4～5		埼玉県秩父市周辺	都市気温と農村調査
	1991	12/11～12		埼玉県秩父・寄居	都市気温と土地利用図作成
	1992	12/3～4		長野県諏訪・茅野	都市気温と農村調査
	1993	12/2～3		山梨県富士吉田市・河口湖町	都市気温と街並み景観調査
	1994	12/5～6	長島 瀬戸 内田 野口・長谷川	東京湾岸 山梨県上野原・甲府盆地 静岡県伊豆 霧ヶ峰	臨海部の開発 土地利用調査 ツーリズムと社会調査 本州亜高山帯の自然環境
	1995	12/4～5	長島 瀬戸 野口・長谷川 内田	群馬県新治村 山梨県韭崎市・白根町 三浦半島城ヶ崎・三浦市内 静岡県熱海・伊豆高原	中山間地域の現状と課題 扇状地地形、用水路と土地利用 城ヶ島の地形地質、三浦市の気温 社会調査の計画・実施・分析
1996	12/11～12	長島 瀬戸 野口・長谷川 内田	群馬県川場村 福島県郡山市・猪苗代町 神奈川県三浦市三崎町・城ヶ島 長野県小諸市・東部町本海野	中山間地域の村づくり 安積疎水と郡山盆地の農業土地利用の調査 三浦半島先端部の気候・地形の観察 植生調査法と気温観測 社会調査の計画・実施・分析の方法 伝統的歴史景観の調査	
1997	9/30～10/1	長島 瀬戸 野口・長谷川 内田 岡島	群馬県昭和村・川場村 群馬県碓塚本町 長野県霧ヶ峰高原 静岡県修善寺町・天城湯ヶ島町 群馬県富岡市・甘楽町	中山間地域の村づくり 大間々扇状地の灌漑用水路と農業土地利用の調査 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 社会調査の計画・実施・分析の方法 上州の歴史地理	
地理実習	1998	10/2～3	長島 市川 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷	群馬県新田町 長野県伊那市周辺 霧ヶ峰高原 栃木県栃木市・日光市・黒羽町 神奈川県小田原市・箱根町 長野県蓼科(茅野市内～蓼科高原～縞枯山)	環境保全型農業 伊那谷における地形と土地利用 本州亜高山帯の自然環境の理解 小京都の風景－風景論入門－ 近世・近代における都市と交通に関する歴史地理調査 山地帯～亜高山帯の植生
	1999	10/4～5	長島 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷	千葉県富里町・多古町 長野県霧ヶ峰高原 神奈川県箱根町 千葉県佐原市・佐倉市 長野県茅野・蓼科・縞枯山方面	北総台地の農業経営－野菜栽培を中心にして－ 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 日本の風景の鑑賞と方法と解釈の方法－風景論入門－ 近世・近代における都市と交通に関する歴史地理調査 山地帯～亜高山帯の植生
	2000	10/2～3	長島 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷	東京湾岸地域(品川～臨海副都心～谷津干潟～幕張メッセ) 神奈川県三浦市三崎町・城ヶ島 静岡県土肥町・松崎町 茨城県土浦市 長野県蓼科方面	東京湾岸地域における開発の現状と課題 三浦半島先端部の気候・植生・地形の観察 西伊豆の風景美と温泉観光地の解説 近世都市土浦の近現代における変遷 山地帯～亜高山帯の植生

地理実習	2001	10/2~3	長島 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	埼玉県川口市・さいたま市 長野県霧ヶ峰高原 神奈川県箱根町・静岡県三島市 栃木県栃木市 長野県茅野市・蓼科方面 東京都墨田区	都市近郊農業・農村の現状と課題 霧ヶ峰高原の小気候と周水河地形 富士箱根の風景美と観光地の解説 近世・近代における都市と交通に関する歴史地理調査 山地帯～亜高山帯の植生 墨田区における工場跡地の利用
	2002	10/2~3	長島 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	埼玉県川口市・さいたま市 長野県霧ヶ峰高原 栃木県那須町・福島県白河市 静岡県三島市 長野県茅野市・蓼科方面 東京都渋谷区	都市地域における農業・農村の現状と課題 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 風景論の基礎、および『おくのほそ道』の場所の意味の解説 近代交通の発達に伴う近代都市三島の変遷 山地帯～亜高山帯の植生 渋谷区における工場跡地の利用
	2003	10/2~3	長島 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	千葉県北総地域（市川・船橋・八千代・佐倉・印西） 長野県霧ヶ峰高原 福島県下郷町 神奈川県鎌倉市 長野県蓼科方面 東京都江東区（区立川南小学校区）	都市近郊地域における緑地（斜面林・谷津田・里山）の現状と今後の課題 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 重伝建地区の風景とその意味 歴史都市鎌倉の近現代における変遷過程 山地帯～亜高山帯の植生 江東区におけるマンション立地の現状
	2004	10/2~3	長島 野口・長谷川 内田 岡島 長岡 加藤	千葉県北総地域（市川・船橋・八千代・佐倉・印西） 長野県霧ヶ峰高原 栃木県藤原町 長野県・群馬県（海野宿・碓氷峠） 長野県蓼科方面 東京都江東区（区立川南小学校区）	都市近郊地域における緑地（斜面林・谷津田・里山）の現状と今後の課題 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 温泉観光地の風景とその意味 上信地方における交通路・交通集落の歴史の変遷 山地帯～亜高山帯の植生 江東区におけるマンション立地の現状
地理学野外実習B	2005	10/3~4	長島 野口・長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	千葉県柏市・茨城県谷和原村・つくば市 長野県霧ヶ峰高原 山梨県富士五湖地域 群馬県甘楽町小幡地区・富岡市 長野県蓼科方面 東京都江東区（区立川南小学校区）	常磐新線（つくばエクスプレス）の開通とその地域への影響 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 風景の鑑賞法と場所に与えられた意味の解説 小幡城下町の変遷と現状、および生糸生産について 山地帯～亜高山帯の植生 江東区におけるマンション立地の現状
	2006	10/3~4	長島 野口 長谷川 岡島 内田 磯谷 加藤	千葉県流山市・柏市・茨城県つくば市・つくばみらい市みらい平地区 長野県霧ヶ峰高原 三浦半島南部 神奈川県小田原市・箱根町 神奈川県三浦市 長野県蓼科方面 東京都中央区	常磐新線（つくばエクスプレス）の開通とその地域への影響 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 三浦半島南部の地形と地質 近世城下町小田原の近現代における変遷 風景の鑑賞法と人文主義地理学の方法 山地帯～亜高山帯の植生 東京都心部における空間利用とその変化
	2007	10/3~4	長島 野口 長谷川 岡島 内田 磯谷 加藤	つくばエクスプレス沿線（千葉県流山市・柏市・茨城県つくばみらい市・つくば市） 長野県霧ヶ峰高原 三浦半島・城ヶ島周辺 埼玉県川越市 群馬県草津町 長野県蓼科方面 東京都中央区	つくばエクスプレスの開通とその地域への影響 霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 三浦半島先端部の地形・地質の観察 近世城下町川越の近現代における変遷 風景の鑑賞法と観光地に与えられた意味の解説 山地帯～亜高山帯の植生 東京都心部における空間利用とその変化

2008	10/3~4	野口 長谷川 岡島 内田 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 三浦半島南部・城ヶ島 神奈川県鎌倉市 千葉県南房総市周辺 長野県蓼科方面 東京都中央区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 海岸地形・海成段丘や地層の観察方法を学ぶ 歴史都市鎌倉の近現代における変遷過程 風景の鑑賞法と観光地の記号論的解説 山地帯～亜高山帯の植生 東京都心部における空間利用とその変化 山村における地域振興策の意義を考える －農村調査法を学ぶ－
2009	9/30～10/1	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 神奈川県三浦市 静岡県金谷町～本川根町周辺 (大井川鐵道沿線) 千葉県香取市佐原地区 長野県蓼科方面 東京都中央区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 三浦半島南部の地形と地質 風景の鑑賞法と観光地に与えられた意味の解説 河川交通の役割と歴史的町並みの形成過程 －佐原を事例として－ 山地帯～亜高山帯の植生 東京都心部における空間利用とその変化 山村における地域振興策の意義を考える －農村調査法を学ぶ－
2010	10/4～5	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 三浦半島・江ノ島 群馬県富岡市・渋川市伊香保町 千葉県佐倉市 長野県蓼科方面 東京都品川区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 様々な海岸地形や地質の観察 風景の鑑賞法と観光地に与えられた意味の解説 近世城下町佐倉の近現代における変遷 山地帯～亜高山帯の植生 品川区における工場跡地の利用 －産業構造の転換と地域－ 山村における地域振興策の意義を考える －農村調査法を学ぶ－
2011	10/5～6	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 神奈川県箱根町 栃木県日光市 埼玉県川越市 長野県蓼科方面 東京都品川区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 箱根火山と周辺地域の地形の特徴を調べる 観光調査と観光地に与えられた意味の解説 近世城下町川越の近現代における変遷 山地帯～亜高山帯の植生 品川区における工場跡地の利用 －産業構造の転換と地域－ 農村における地域資源を活用した特産品づくり
2012	10/3～4	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 神奈川県三浦市・横須賀市周辺 山梨県北杜市・長野県小諸市 栃木県日光市・日光市今市 長野県蓼科方面 東京都品川区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 様々な海岸地形や地質の観察 観光調査と観光地に与えられた意味の解説 近世都市栃木の近現代における変遷 山地帯～亜高山帯の植生 品川区における工場跡地の利用 －品川の地誌、とくに産業構造転換と地域変化について－ 農村における地域資源を活用した特産品づくり
2013	10/5～6	野口 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 栃木県那須塩原市塩原温泉郷・埼玉県久喜市鷺宮地区 神奈川県小田原市・箱根町 長野県蓼科方面 東京都品川区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 観光調査と観光地に与えられた意味の解説 近世城下町小田原の近現代における変遷 山地帯～亜高山帯の植生 品川区における工場跡地の利用 －品川の地誌、とくに産業構造転換と地域変化について－ 農村における地域資源を活用した特産品づくり

地理学野外実習B	2014	10/1~2	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県霧ヶ峰高原 三浦半島南部と城ヶ島 長野県須坂市・小布施町・ 山ノ内町湯田中地区 群馬県桐生市・栃木県日光市足尾地区 長野県蓼科方面 東京都品川区 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 海岸地形や地質を学ぶ 観光地の調査と観光地に与えられた意味の解説 近代産業都市の発達と景観変遷 山地帯～亜高山帯の植生 品川区における工場跡地の利用 －品川的地誌、とくに産業構造転換と地域変化について－ 農村における地域資源を活用した特産品づくり
	2015	10/6~7	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 宮地	長野県霧ヶ峰高原 神奈川県三浦市周辺(三浦半島南部と城ヶ島) 長野県上田市・長野市松代地区 長野県東御市(旧海野宿)・軽井沢町・ 群馬県安中市(旧中山道・旧碓氷峠鉄道施設) 長野県蓼科方面 群馬県川場村	霧ヶ峰高原を例とする、本州亜高山帯の自然環境の理解 海岸地形や地質を学ぶ 観光地の調査と観光地に与えられた意味の解説 上信地方における交通路・交通集落の歴史の変遷 山地帯～亜高山帯の植生 農村における地域資源を活用した特産品づくり
	2016	9/27~28	長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	三浦半島 長野県軽井沢町・群馬県安中市 千葉県香取市佐原地区 長野県蓼科方面 東京都品川区 群馬県川場村	三浦半島の海浜地形の観察 観光地の調査と観光地のイメージの解説 歴史的街並みの形成過程－佐原を事例として－ 山地帯～亜高山帯の植生 品川区における工場跡地の利用 －品川的地誌、とくに産業構造転換と地域変化について－ 農村における地域資源を活用した特産品づくり



霧ヶ峰での野外実習
(2002年10月：野口先生引率)



三浦半島での露頭の観察中
(2008年10月：長谷川先生引率)



川場村で生産者へのヒアリング
(2014年10月：宮地先生引率)



展望台から風景の読み方を学ぶ
(2008年10月：内田先生引率)

3) 3年生の野外実習

授業科目名	年度	実施日	指導教員	調査地域	調査内容
巡検	1983	10/18~21		静岡県浜松・天竜	教員（ゼミ）別に行動
	1984	10/16~19	野口 浅井	長野県長野市 静岡県沼津・三島 八丈島 福島県福島市 高田	防風林と気温分布
	1985	10/16~19	野口	霧ヶ峰	植生分布に及ぼす気候の影響
	1986	10/20~23	野口	静岡県富士市	地下水の水質
	1987	10/19~22	野口	長野県松本	土地利用と都市の気温
	1988	10/17~20	大崎 野口 太田 長谷川	愛知県名古屋	盆地の都市気温分布 碓氷川の段丘地形
				埼玉県秩父 長野県松本 群馬県松井田	
		10/18~21	横山	岩手県一関市および周辺地域	
	1989	10/23~26	大崎 長島 野口 太田 長谷川	大阪 石川県金沢 山梨県河口湖 新潟県新潟 八ヶ岳東麓	近畿圏の都市開発問題 都市再開発、街並み保存、防雪 湖面温度と日最低気温、都市気温 災害地理、定期市場、果樹・地場産業 塩川地域の地形発達史
	1990	10/22~25	大崎 長島 野口 太田 長谷川	大阪 宮城県仙台 霧ヶ峰 長野県伊那・飯田 養老溪谷	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 周水河地形・植生・小気候調査 各自のテーマで調査 河岸段丘地形の調査
	1991	10/14~17	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田	静岡県浜松・天竜 山梨県甲府 霧ヶ峰 養老溪谷 長野県松本	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 微地形と風 段丘堆積物 各自のテーマで調査
	1992	10/14~17	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田	長野県長野市 新潟県新潟市 富士山 新潟県津南町 愛知県名古屋	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 富士山麓の小気候・植生調査 信濃川の段丘地形 各自のテーマで調査
	1993	10/12~15	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田	兵庫県神戸 栃木県宇都宮 岐阜県高山 福島県田島町 京都府京都	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 官署の気温に与える都市化とヒートアイランド 段丘・水質・植生 各自のテーマで調査
	1994	10/17~20	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田	新潟県新潟 長野県長野市 埼玉県秩父 福島県田島町 佐渡島	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 盆地のヒートアイランドと都市化 段丘・水質・植生 各自のテーマで調査

巡検	1995	10/11～15	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田	宮城県仙台 群馬県前橋 福島県いわき市小名浜 長野県伊那・木曾駒ヶ岳 北海道札幌	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 気温・海面水温・漁獲高 河岸段丘と氷河地形 各自のテーマで調査
	1996	10/22～25	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田	山梨県甲府市および周辺地域 福島県福島市・郡山市および周辺地域 福島県いわき市小名浜 六甲山地周辺 大阪府大阪市周辺	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 東北太平洋岸の海面水温変動、漁獲量変動、気温変動 六甲山地周辺の活断層、段丘地形の調査、水文地形 各自のテーマで調査
	1997	10/21～24	長島 瀬戸 野口 長谷川 内田 岡島	大阪 宮城県仙台市および周辺地域 千葉県銚子市 北海道道東地方 沖縄県那覇市周辺 愛知県名古屋市	各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 銚子周辺の気候環境と海況 道東の地形 各自のテーマで調査 名古屋市とその周辺における地域調査
地理実習	1998	10/28～31	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷	福島県会津若松市 茨城県水戸市および旭村 千葉県南房総・千倉町周辺 岩手県盛岡市 新潟県新潟市 伊豆半島（南伊豆町、河津町、天城山）	各自のテーマで調査 気象環境に与える海の影響、都市の気候環境 完新世の海岸段丘、海岸植生、 海岸微地形と海草、海藻類の分布、GISを使った土地利用 各自のテーマで調査 新潟市とその周辺における地域調査 照葉樹林帯～ブナ帯の自然-植生を中心として-
	1999	10/27～30	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷	愛媛県松山市および周辺地域 長野県松本市 千葉県南房総・千倉町周辺 大阪府大阪市周辺 岡山県岡山市 伊豆半島南部	各自のテーマで調査 松本盆地の気候環境の理解 完新世の海岸段丘の調査 各自のテーマで調査 岡山市とその周辺における地域調査 照葉樹林帯～ブナ帯の植生
	2000	10/24～27	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷	広島県尾道・因島および周辺地域 福島県いわき市小名浜 石垣島 青森県弘前市周辺 和歌山県和歌山市とその周辺 静岡県南伊豆（南伊豆町、河津町）	各自のテーマで調査 いわき市小名浜地区の気候環境調査 石垣島東部でみられる近年の自然環境の変化の調査 各自のテーマで調査 和歌山市とその周辺における地域調査 照葉樹林帯の植生
	2001	10/23～26	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	大阪・神戸および周辺地域 福島県福島市とその周辺 千葉県千倉町周辺 北海道札幌市周辺 長野県長野市 静岡県南伊豆町 千葉県木更津市	各自のテーマで調査 福島盆地における気候の永年変化と都市の気候 グループごとのテーマで調査 各自のテーマで調査 長野市とその周辺における地域調査 南伊豆地域の生物地理 木更津市とその周辺における地域調査
	2002	10/22～25	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	新潟県新潟市および周辺地域 福島県会津若松市 伊豆大島 兵庫県神戸市周辺 静岡県静岡市 静岡県南伊豆町 三重県津市とその周辺	各自のテーマで調査 会津盆地における気候の永年変化と都市の気候 伊豆大島の火山性海岸地形の調査、火山災害と防災、 リモートセンシングによる土地被覆調査とランドトゥールース 各自のテーマで調査 静岡市とその周辺における地域調査 南伊豆地域の生物地理 津市とその周辺における地域調査

地理実習	2003	10/21~24	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	大阪・神戸および周辺地域 岐阜県高山市 東京都神津島村 福井県福井市周辺 宮城県仙台市と宮城県中南部 静岡県西伊豆町方面 長崎県長崎市	各自のテーマで調査 高山市における小気候調査：都市規模とヒートアイランドとの関係 神津島長浜海岸における海浜地形の形成環境、神津島における斜面崩壊の要因に関する分析 各自のテーマで調査 仙台市とその周辺地域における地域調査 西伊豆の生物地理 長崎市とその周辺における地域調査
	2004	10/21~24	長島 野口 長谷川 内田 岡島 長岡 加藤	栃木県日光市および周辺地域 新潟県上越市高田地区 伊豆大島 鳥取県米子市周辺 兵庫県南部 静岡県南伊豆町方面 北海道苫小牧市	各自のテーマで調査 上越市およびその周辺地域における小気候調査 伊豆大島の海浜地形、溶岩流の形態的特徴の調査 各自のテーマで調査 兵庫県南部の各地における地域調査 南伊豆地域の生物地理 苫小牧市とその周辺における地域調査
地理学野外実習C	2005	10/25~28	長島 野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤	秋田県秋田市および周辺地域 岐阜県高山市 福島県田島町とその周辺地域 高知県高知市周辺 福岡県北九州市とその周辺地域 和歌山県日置川町 兵庫県加古川市とその周辺	各自のテーマで調査 高山市における小気候調査：都市規模とヒートアイランドとの関係 段丘地形、崩壊地形、リモートセンシングによる調査 各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 紀伊半島南部の生態地理 各自のテーマで調査
	2006	10/24~27	長島 野口 長谷川 岡島 内田 磯谷 加藤	山梨県甲府市および周辺地域 新潟県上越市高田地区 福島県南会津町周辺 岐阜県岐阜市とその周辺 沖縄本島 高知県須崎市 佐賀県伊万里市とその周辺	各自のテーマで調査 上越市高田およびその周辺における小気候調査：都市規模とヒートアイランドとの関係 河岸段丘の形成過程、リモートセンシングのグランドトゥールース 各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 高知県南部の生態地理 各自のテーマで調査
	2007	10/24~27	長島 野口 長谷川 岡島 内田 磯谷 加藤	宮城県仙台市および周辺地域 栃木県宇都宮市・日光市 久米島 岡山県岡山市および周辺地域 北海道札幌市とその周辺 宮崎県宮崎市南部とその周辺 福岡県大牟田市とその周辺	各自のテーマで調査 日光市（旧今市市）およびその周辺地域における小気候調査：都市規模とヒートアイランドとの関係 宇都宮（地方気象台）と日光（観測所）との気候環境の違い サンゴ礁海岸の観察と記載 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 各自のテーマで調査 宮崎県南部の生態環境 各自のテーマで調査
地理学野外実習C	2008	10/24~27	野口 長谷川 岡島 内田 磯谷 加藤 宮地	埼玉県熊谷市・秩父市・長瀨町 伊豆大島 群馬県前橋市および周辺地域 大分県大分市周辺 伊豆半島南部 福井県敦賀市とその周辺 福島県二本松市およびその周辺地域	公的気象データと観測によるデータ 海岸地形・火山地形・火山噴出物のリモートセンシング 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 各自のテーマで調査 伊豆半島南部の生態環境 各自のテーマで調査 中山間地域における産業振興と地域づくりの実態を学ぶ

2009	10/27~30	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	長野県長野市・須坂市・小布施町 東京都神津島村 沖縄県石垣市とその周辺 大阪府大阪市および周辺地域 広島県三次市 鹿児島県出水市 岩手県二戸市およびその周辺地域	地方気象台の役割と気候要素の永年変化・土地利用と気温分布 神津島の地形を調べる 各自のテーマで調査 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 里山の生態地理 各自のテーマで調査 農山村における地域問題を考える
2010	10/26~29	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	千葉県銚子市 千葉県南房総市千倉町周辺 北海道札幌市およびその周辺地域 富山県富山市およびその周辺地域 高知県奈半利町とその周辺地域 長野県中野市 北海道清水町	銚子の気候環境について 段丘地形と海岸地形 各自のテーマで調査 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 高知県東部の生態地理 各自のテーマで調査 農山村における地域問題を考える
2011	10/25~28	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	千葉県銚子市 伊豆大島 大阪府大阪市とその周辺 愛知県名古屋市およびその周辺地域 島根県大田市とその周辺地域 愛媛県八幡浜市とその周辺 宮崎県綾町	千葉県太平洋岸の気候環境 伊豆大島を自然地理学的視点から分析する 各自のテーマで調査 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 島根県中北部の生態地理 各自のテーマで調査 農山村における地域問題や地域づくりの調査
2012	10/22~25	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	群馬県前橋市・沼田市 福島県南会津町周辺 広島県広島市およびその周辺地域 静岡県静岡市および周辺地域 愛媛県大洲市とその周辺地域 大分県臼杵市とその周辺 愛媛県今治市	関東地方内陸部の気候環境 南会津町周辺を自然地理学的視点から分析する 各自のテーマで調査 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 愛媛県北西部の生態地理 各自のテーマで調査 農山村における地域問題や地域づくりの調査
2013	10/22~25	野口 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	新潟県新潟市と長岡市周辺 大阪府大阪市およびその周辺地域 青森県青森市および周辺地域 鳥取県大山山麓付近(米子市とその周辺地域) 北海道函館市とその周辺地域 北海道帯広市とその周辺地域	新潟地方気象台の役割・新潟県の気候環境について 各自のテーマで調査 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 鳥取県大山山麓の自然地理 各自のテーマで調査 各班ごとのテーマに基づいた地域調査
2014	10/21~24	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	富山県富山市とその周辺地域 千葉県南房総市(旧千倉町周辺) 福岡県福岡市およびその周辺地域 広島県福山市および周辺地域 香川県さぬき市 北海道中標津町とその周辺 北海道美瑛町	地方気象台の役割・日本海側の気候と住民生活 各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 主として歴史地理学・交通地理学に関する地域調査 香川県北東部の生態地理 各自のテーマで調査 各班ごとのテーマに基づいた地域調査
2015	10/19~22	野口 長谷川 内田 岡島 磯谷 宮地	石川県金沢市とその周辺地域 千葉県南房総市(旧千倉町周辺) 愛媛県松山市およびその周辺地域 宮城県仙台市および周辺地域 徳島県阿南市とその周辺地域 長崎県島原市とその周辺地域	北陸地方の冬の南風について 各班ごとのテーマに基づいた地域調査 各自のテーマで調査 歴史地理学・都市地理学等に関する地域調査 徳島県南東部の生態地理 各班ごとのテーマに基づいた地域調査
2016	10/25~28	長谷川 内田 岡島 磯谷 加藤 宮地	福島県南会津町・下郷町 沖縄県那覇市とその周辺 香川県高松市とその周辺 香川県さぬき市 山梨県甲府市 広島県世羅町	各班ごとのテーマに基づいた地域調査 各自のテーマで調査 各自のテーマで調査 各班ごとのテーマに基づいた地域調査 各自のテーマで調査 各班ごとのテーマに基づいた地域調査

4) 4年生の野外実習

授業科目名	年度	実施日	指導教員	調査地域	調査内容
巡検	1983	5/13~14		群馬県嬭恋村	高原野菜を中心とした嬭恋村の農業について
	1984	5/14~15	長島	長野県岡谷	農業・観光 他
				山梨県甲府	
			山梨県甲府		
	野口	霧ヶ峰	風と偏形樹		
	1985	5/15~16	長島	静岡県静岡市	都市気温と水質調査
野口			静岡県静岡市・清水市		
太田			山梨県甲府		



←照葉樹の森で毎木調査

(2015年10月：磯谷先生引率)



市役所でのヒアリング中→

(2009年10月：加藤先生引率)

※野外実習の記録は、以下の文献を参考にまとめた。

資料：国土館大学文学部・同創設30周年記念行事実行委員会編 1996.『国土館大学文学部創設30年史』、国土館大学文学部・同創設40周年記念行事実行委員会編 2006.『国土館大学文学部創設40年記念誌』、国土館大学文学部・同創設50周年記念事業実行委員会編 2016.『国土館大学文学部創設50年記念誌』、国土館大学地理学教室『Newsletter』（各号）、地理学教室ホームページ記事などより作成。

9. 入学者数・在籍学生数・卒業者数

年度	入学者数	在籍学生数				卒業者数
		1年	2年	3年	4年	
1966	36					
1967	67					
1968	84					
1969	81	79	64	50	25	24
1970	61	63	64	53	47	43
1971	49	50	50	54	51	42(1)
1972	65	66	43	42	63	55
1973	57	74	58	35	39	38
1974	22	22	66	52	36	33
1975	45	49	23	56	54	48
1976	75	78	46	17	60	52
1977	62	75	66	38	25	16
1978	59	70	56	65	38	33
1979	50	53	60	51	67	62
1980	50	56	45	49	51	51
1981	75	82	56	32	51	47
1982	62	66	70	49	36	33
1983	87	86	67	61	51	45
1984	46	47	83	58	66	55
1985	44	44	52	75	65	59
1986	74	79	40	45	79	70
1987	81	82	79	34	51	42
1988	80	80	93	61	40	31
1989	78	80	94	63	66	54
1990	77	77	83	72	71	54
1991	67	68	78	78	86	52
1992	80	80	70	72	105	84
1993	58	59	82	65	91	69
1994	72	72	64	74	81	69
1995	73	73	79	51	83	74
1996	79	81	74	71	65	49
1997	62	61	85	67	78	71
1998	77	75	65	76	72	64
1999	73	73	74	54	82	68
2000	72	72	75	64	64	56
2001	74	74	72	62	70	57
2002	71	71	76	59	71	61
2003	82	82	76	63	66	51
2004	75	75	85	61	71	50
2005	70	70	79	74	79	63
2006	67	67	76	62	83	72
2007	75	76	70	61	66	56
2008	76	77	89	52	68	57
2009	74	74	88	69	57	39
2010	83	82	84	70	83	59
2011	67	67	86	67	89	62
2012	59	60	80	62	89	66
2013	74	75	68	61	79	57
2014	60	60	84	53	78	55
2015	75	75	75	62	65	47
2016	62	64	86	57	78	

資料：国土館大学文学部・同創設50周年記念事業実行委員会編 2016.

『国土館大学文学部創設50周年記念誌』を編集.

10. 大学院人文科学研究科地理・地域論コース在籍学生数・修了生数

年度	修士課程			博士課程			
	1年	2年	修了生	1年	2年	3年	修了生
2001	4						
2002	1	4	2				
2003	2	2		1			
2004	1	2	2		1		
2005		1	1				1
2006	1						1
2007	1	1	1				1
2008		1					1
2009	2	1					1
2010	1	3	2				
2011		2	2				
2012							
2013	2						
2014	1	2	1	1			
2015	1	2		1	1		
2016		2	1		1	1	

資料: 大学院課提供資料より作成.

注. 博士課程は, 2003年度に設置.

11. 歴代の地理学専攻／地理・環境専攻の学生主事・学生担当職員

年度	1年	2年	3年	4年
1986	本間文男	本田昭夫	丸山 登	秋吉一益
1987	本田昭夫	本間文男	青山幸暘	丸山 登
1988	本間文男	本田昭夫	丸山 登	青山幸暘
1989	青山幸暘	本間文男	本田昭夫	丸山 登
1990	丸山 登	青山幸暘	本間文男	本田昭夫
1991	丸山 登	丸山 登	青山幸暘	本田昭夫
1992	門田千代子	門田千代子	山口和彦	青山幸暘
1993	前田 剛	門田千代子	山形政司	青山幸暘
1994	門田千代子	竹村俊幸	前田 剛	青山幸暘
1995	竹村俊幸	門田千代子	鬼塚孝之	前田 剛
1996	門田千代子	竹村俊幸	前田 剛	鬼塚孝之
1997	竹村俊幸	門田千代子	鬼塚孝之	前田 剛
1998	門田千代子	門田千代子	前田 剛	苫米地示路
1999	門田千代子	門田千代子	苫米地示路	前田 剛
2000	門田千代子	門田千代子	前田 剛	鬼塚孝之
2001	門田千代子	門田千代子	鬼塚孝之	前田 剛
2002	門田千代子	門田千代子	前田 剛	鬼塚孝之
2003	佐藤 孝	佐藤 孝	鬼塚孝之	前田 剛
2004	佐藤 孝	佐藤 孝	前田 剛	鬼塚孝之
2005	室 修平	室 修平	鬼塚孝之	前田 剛
2006	室 修平	室 修平	山口和彦	前田 剛
2007	筒井尚美	筒井尚美	前田 剛	山口和彦
2008	藤田光明	藤田光明	山口和彦	前田 剛
2009	藤田光明	藤田光明	山口和彦	山口和彦
2010	藤田光明	藤田光明	苫米地示路	福地みどり
2011	藤田光明	藤田光明	福地みどり	苫米地示路
2012	藤田光明	藤田光明	苫米地示路	福地みどり
2013	藤田光明	藤田光明	福地みどり	苫米地示路
2014	田房妙子	片柳太郎	苫米地示路	福地みどり
2015	田房妙子	田房妙子	福地みどり	苫米地示路
2016	片柳太郎	片柳太郎	福地みどり	福地みどり

資料：国土館大学文学部・同創設50周年記念事業実行委員会編 2016.

『国土館大学文学部創設50周年記念誌』, 各年度の卒業アルバムから作成.

12. 地理学教室スタッフによる出版物

1) Newsletter

地理学教室と学生のコミュニケーションを目的に、教室が1988年6月から発行する小冊子である。発行当初から1995年(15号まで)は、6月と12月に発行されていたが、1996年以降は1月と4月に(16号から43号まで)、さらに2010年以降は1月、4月、5月と年3号の発行体制へと変化してきた(44号以降)。

発行当初の6月号では、教室人事、非常勤講師からのメッセージ、専任教員の1年間の研究活動、各教員の1週間の在室時間、卒論リスト、就職先、教室予算、新規購入備品、図書などを掲載し、12月号では、1年間の教室行事記録、ゼミ単位の巡検報告をはじめ、その時々情報を載せていた。

1月と4月発行体制への移行に伴い、1月号では1年間の教室行事記録、ゼミ単位の巡検報告、地理ワークショップの開催報告(2002年、28号以降)をはじめその時々情報を、4月号では教室人事、教室の1年間の行事予定、各教員の1週間の在室時間、卒論リスト、就職先、新規購入備品、図書、専任教員の1年間の研究活動、などをそれぞれ掲載するようになった。この4月号は、その後新入生をはじめとする各学年のガイダンスで配布されることになったことから、各教員の1週間の在室時間を示すことができなくなった。そのた

め、近年では、5月の連休明けをめどに5月号を発行し、教員の在室時間を学生たちへ伝達している。また、3号体制になるなかで、就職活動体験談や活躍する卒業生、教員の執筆した著書などの紹介も行われるようになり、充実した誌面づくりが図られている。

←
1988年6月に発行された Newsletter の第1号

大崎晃専攻主任のあいさつに始まる Newsletter は、2017年1月現在65号を数える。当時の専任教員の思いは、現在の専任教員へ受け継がれている。

国士新大学・地理学教室 JUNE · 1988
NEWSLETTER NO. 1
154 東京都世田谷区世田谷4-28-1 TEL.03(422)5341 (内線) 635/636

《本号の内容》

- 1: 発刊のあいさつ
- 2: 教室をめぐる動き・63年度教室人事
- 3: 研究室の研究室日・時間: 各先生の講義・在室時間割
- 4: 本年度開講科目の一覧と担当者・開講日
- 5: 新カリキュラムの説明と科目の学年別配当
- 6: 研究教材用備品、図書の整備状況など
- 7: 今年度の巡検について
- 8: 教室スタッフの最近の活動と予定

発刊のあいさつ 専攻主任 大崎 晃

地理学教室は昭和41年の創設以来22年を数えますが、おなじ頃発足した教室としては奈良大学が、後れて出発した教室には関西大学があるくらいですから、本教室はわが国の大学のなかではもともと後発の部類に属しましょう。本教室はその内外の事情から創設の基礎を築くのに10年余を要し、ようやくこの数年来、教員の世代交替、現代にむけてのカリキュラムの改訂、地理学会を通じての教職員・学生・卒業生間のコミュニケーションおよび研究活動など軌道にのりようになりつつあります。しかし、備品・施設の整備、教室の将来構想および計画づくり、学生の学習・研究活動の活性化、卒業生の進路など、大小さまざまな課題がまた山積みしております。その中でも、すでに本年度の予算がついている写真関係の授業ができるよう9号館の暗室工事、昨年度から整備にとりかかった考古学との共同の16号館の標本資料室を一般公開にこぎつけること、学生の各種学習・研究グループが即時並行して開業できるような教室内の環境づくり、卒業生に申しあげている非常勤講師の諸先生方とのコミュニケーションなどは、本年度中に是非とも実現したいと念じております。

さて、この度おさまきながらアメリカの大学の教室のように、本教室でもニュースレターの発行を企画いたしました。このニュースレターは、関係者方々の関心に応ずるために教室の情報を提供するもので、今後折りにふれ刊行していく予定ですので、どうぞご利用いただきたいと思います。




教室をめぐる動き・63年度教室人事

<退任>
 浅井 得一 先生(停年)

<兼任の退任>
 北川 善広 先生(本属工学部の都合)

<在外研究>
 長崎 弘道 先生(カナダ・ハンガリー)

<新任>
 坂谷川 均 先生(専任講師)
 瀬戸 玲子 先生(非常勤講師・元建設大で学校教育)
 小倉 眞 先生(非常勤講師・千葉高科大学助教授)
 福島 義和 先生(非常勤講師・専修大学助教授)

Jack pine Black spruce Eastern hemlock

-1-

2012 年の 1 月には、50 号の節目となる Newsletter が発行された。発行当初、この小冊子の発行を企画した野口泰生教授（当時）の記事を再録し、この小冊子の発行する意義を確認したい。

なお、Newsletter のバックナンバーは、すべて地理学教室のホームページで読むことができる。

NEWSLETTER No.50 の発刊に当たって

野口 泰生

数年前、加藤先生と私は地理学専攻の学生 10 人あまりを連れて台湾に海外巡検に出かけた。お世話になった 中国文化大学は 国士舘大学の姉妹提携校で、地理学科長 Dr.Hsueh（スエ教授）が連日大学の大型バスで私たちを案内してくれた。彼の旺盛な奉仕精神には頭が下がる思いだったが、その彼が、ある時、バスのマイクに向かって遠慮がちにこう言った。「なんだ、目を開けているのは Miss Suzuki（院生の鈴木敬子さん）だけで、あとはみんな寝ているではないか」と。おそらく、我慢できずに口に出たのであろう。巡検も日が経つに連れ疲れが貯まり、仕方のない部分もあったが、引率者としては赤面の至りであった。しかし、もっと気になることがあった。それは、「みんな地理の学生じゃないのか」「自分の生まれ育った環境 と違う土地に来て、車窓から飛び込む風景に何の興味も沸かないのか」、「毎日の通学電車と同じ気分なのか」という点であった。このことと今回 50 号という節目を迎えた私たちの Newsletter とどう関係があるのかと問われそうだが、その説明は最後に改めてすることにしよう。

ところで、私には知られると間違いなくあきれられる癖がある。およそ 40 年前、私はハワイ大学大学院に 6 年間在学していた。その間、地理学科の私のメールボックスに入れられたあらゆる印刷物やメモを、私はすべて捨てずに取ってきた。いつか使うつもりで貯めたわけではなく、学校の返却物や年賀状や教授会資料と同じく、捨てる習慣がなかっただけである。今バインドーの厚さを測ってみると 68cm にもなる。このように私は、物持ちが「よい」という癖があるのである。このバインドーから、当時のハワイ大学地理学科の年間活動の一端が分かる。このなかに地理学科が年に 2 度発行していた「Hoike Honua」（ハワイ語で「世界を見せる」、すなわち「地理」）という Newsletter がある。この「Hoike Honua」が、今回 50 号を迎える 国士舘大学地理学教室 Newsletter のお手本となった（資料 1）。今この冊子を改めて読み返してみると、主な記事は世界各地で活躍する教員や大学院生や卒業生の動向が中心で、学部生相手の記事はほとんど無い。しかし、それは仕方のないことであり、アメリカの大学では日本と制度が違うため（古今書院「地理」、55(9)参照）、Newsletter の情報源や配布先も常に大学院生が中心であった。「発行していた」と過去形で書いたのは、国士舘大学地理学教室の Newsletter50 号発刊を機会

にハワイ大学の友達にメールで確かめてみたところ、とっくの昔に廃刊になってしまったというところであった。当時から記事集めに苦勞している様子だったので「さもありません」というところである。一方、私たちの Newsletter は主に学部生を対象としたものであり、1988年の発刊当初から地理学教室と学生とのコミュニケーション、地理学教室と学生父母との交流が目的に発刊されてきた。日常的で、かつ大事な情報を掲示板代わりに提供し、読みごたえある Newsletter を目指してきた。

話を最初に戻すが、私たちは比較することで学ぶことが多い。昔から「他人のふり見て、我がふり直せ」とか「かわいい子には 旅をさせよ」と言うが、100年前、中央アジアを旅したアメリカの地理学者ハンチントンの「Pulse of Asia」を持ち出すまでもなく、世界には様々な国や民族が存在し、政治、教育、医療、交通、警察など似通った組織がある。当然、先発組は後発組より豊富な経験をもち、環境が異なれば組織も異なる。しかし、同じ人間のつくる社会だから、似ているものも多く、その中には学ぶものも多い。地理学を学ぶ学生だからこそ、外国へ行ったら目を見開いて車窓に映る外の景色に注目して欲しいと思うのだ。今思うに、ハワイ大学地理学科には私が真似したいと思うことがいろいろあった。Newsletter「Hoike Honua」もその一つであったが、次ページに示すきれいなガラス張りでオープンな雰囲気の仕事室もそうであった。しかし、他人のアイデアをスムーズに移植するのはそう簡単ではない。この Newsletter で言えば、良き理解者・協力者として大崎先生や当時若き長谷川先生がいたことが大きかったと思う。今後も地理・環境専攻の情報伝達ツールの一つとして細々でも続いていってほしいと願っている。

※同号に掲載された写真、資料類は、ホームページを参照ください。

2) 新入生用「地理学教室のしおり」

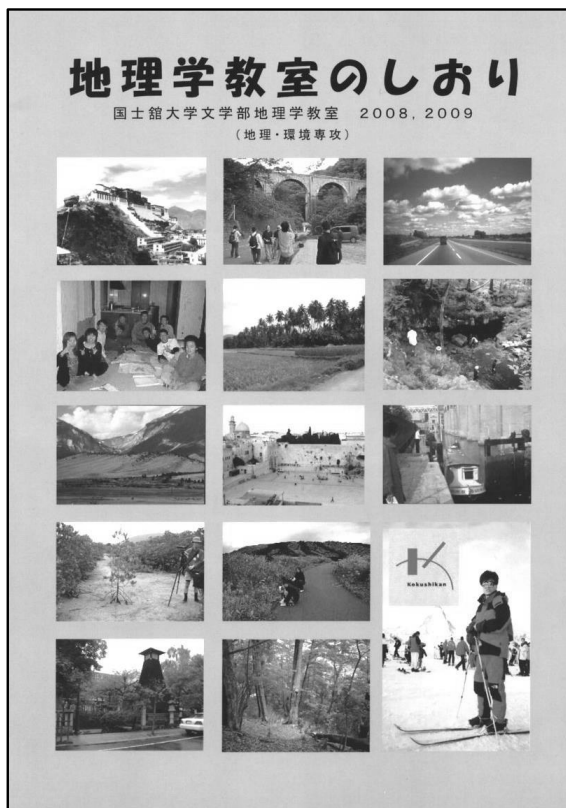
地理学教室では、地理学専攻（その後の地理・環境専攻）の新入生に当該専攻の教育活動を紹介する「地理学教室のしおり」を1990年以来作成し、配布してきた。その後、ほとんど毎年改定され、サイズも様々に変化し、その都度魅力ある表紙に入れ替えられた。

しおりの主旨は、4年間の地理学学習にとって必要な地理学教室の情報を新入生の段階から提供しておこうというもので、特に、2つのキャンパス制度のもとで、世田谷の地理学教室と疎遠となりがちな鶴川キャンパス1～2年生をサポートするために考えられた企画である。この冊子は、毎年開かれる父母懇談会や鶴川のオープンキャンパス（1995年夏）でも配布され、教室の紹介に役立っている。

冊子の内容は、専任教員の紹介に始まり、地理学教室・研究室の配置、研究図書・地図・空中写真の利用法、4年間のカリキュラムとその履修方法、国土館地理学会の紹介、大学生生活のアドバイス、資格・就職、大学周辺の食堂・書店・地図販売店案内、教室備品リスト、

卒論リストなどで、冊子には大学生生活に必要な事柄が満載されている。

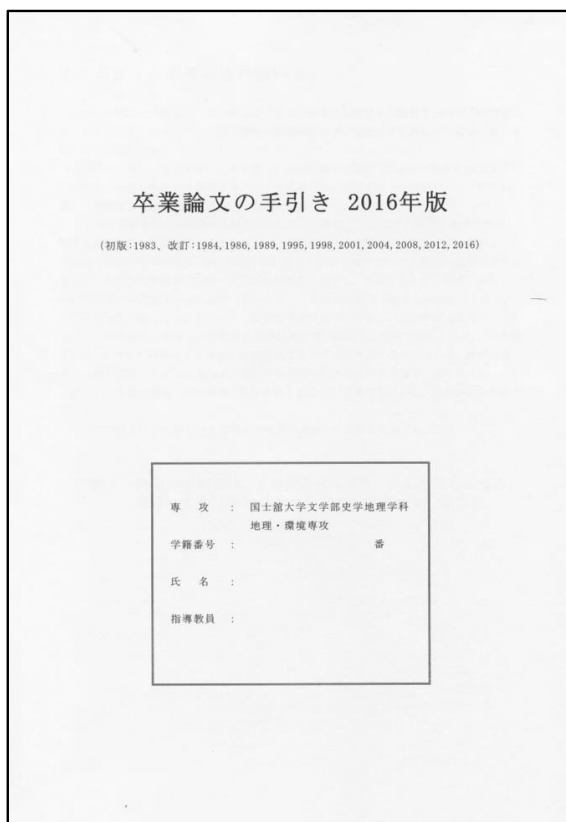
長年にわたって新入生の大学生活にかかわる情報提供に役割を果たしてきたこのしおりは、2009年度をもって配布を取りやめた。Newsletterの内容の充実、専攻ホームページの充実、インターネットと携帯電話（スマートフォン）の普及にともない、新入生に得てほしい情報源が多様化したためである。右の「地理学教室のしおり」は、2008年度と2009年度に配布した改訂第11版（総ページ数：40ページ）であり、最後の「教室のしおり」となったものである。



3)「卒業論文の手引き」

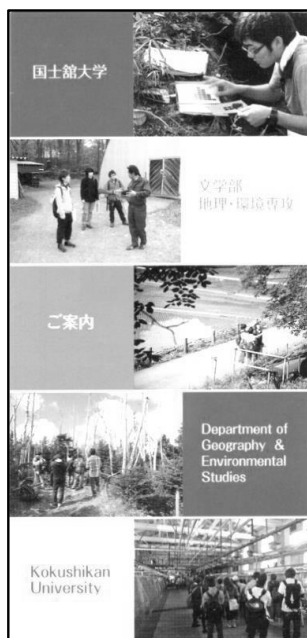
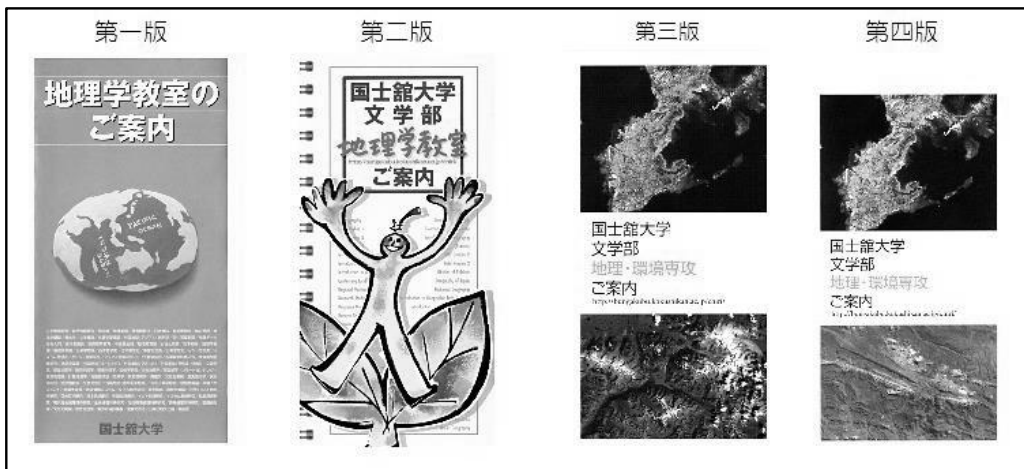
地理学専攻が開設されて以来、卒業論文は必修科目として置かれてきた。今日のカリキュラムにおいても、卒業論文の作成に向けて、3年次以降のゼミ（地理学演習）において学生たちは徹底した指導を受けている。卒業論文の共通した事項について「卒業論文の手引き」にまとめられ、ゼミに配属された学生たちに配布されている。

1983年に初版の「卒業論文の手引き」が作られて以来、10回もの改訂が重ねられた。2016年版の「手引き」（総ページ数：58ページ）のなかには、①卒論に関する基本事項（書き下



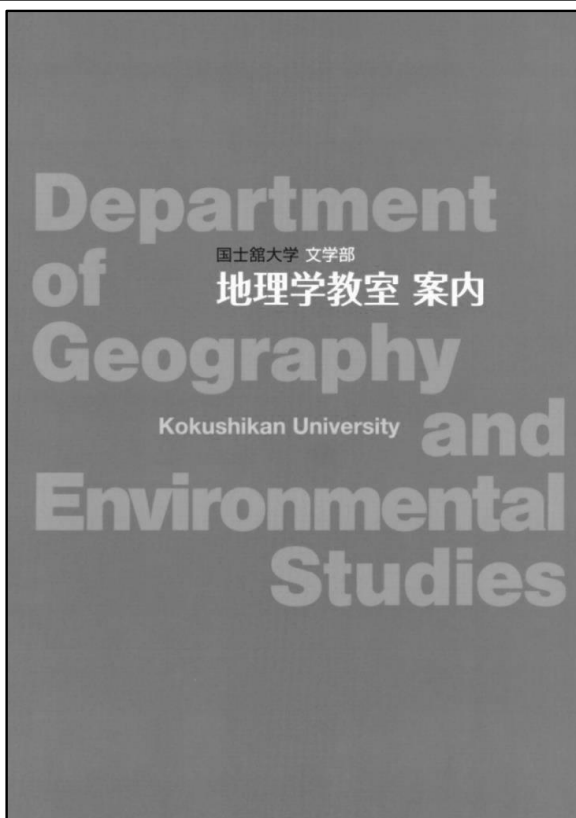
ろしの禁止、論文の提出、公開口頭試験、卒論の評価、卒論の保存・永久貸し出しなど)、②論文の体裁(論文の分量、用紙、文章表現上の注意、提出論文の構成)、③図・表・写真の体裁、④卒論テーマの建て方、⑤本文の構成と内容:論文の書き方、⑥引用と参考文献、⑦文献検索について、⑧社会調査について、に加えて、付録として地理学関連の専門雑誌一覧(国士館大学図書館所蔵分、地理実習室所蔵分)、web上で内部公開されている卒業論文タイトルの一覧が綴じられている。

4)専攻パンフレット「地理学教室のご案内」



↑ (上) 第5版

第6版 (右) →



地理学教室では、1998 年度から専攻独自のパンフレットを発行してきた。「教室のしおり」によると、当初、このパンフレットは学生の就職活動を支援する目的で作成されたという。現在では、地理学教室 PR にも利用されている。

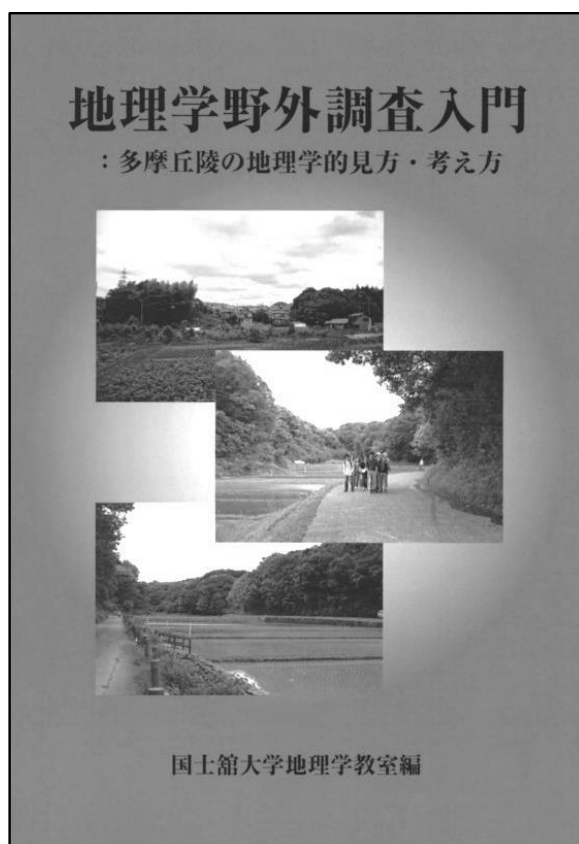
発行から約 20 年が経とうとしているが、この間 5 回の改訂作業が行われ、その都度写真や文言の微修正が加えられてきた。第 5 版は 2011 年度から使用されたものである。しかし、第 5 版までの三つ折りパンフレットでは（三つ折りパンフレットは独特の体裁で、評判もよかったが）、必ずしも地理学教室の特徴や日常の学習・教育活動の様子、実習の魅力を伝えきれないと判断し、2015 年度に A4 版・総ページ数 14 ページのパンフレットを作成し、合わせて配布することとした。従来から受け継がれてきた地理学的見方・考え方の解説をはじめ、地理・環境専攻の特徴、キャンパスカレンダー、カリキュラムの特徴、研究室ってどんなところ？、卒業後の進路、先輩からのメッセージが、数多くの写真とともに綴じられている。

5)『地理学野外調査入門—多摩丘陵の地理学的見方・考え方—』

本書は、2013 年 5 月に出版された地理学教室スタッフによる地理学および野外調査の入門テキストである。副題に、多摩丘陵の地理学的見方・考え方とあるように、このテキストは、近年継続的に多摩丘陵地域で実施されている地理学野外実習 A（1 年生必修科目）のテキストとして使用することを意識して作られた。

総ページ数 131 ページの本書は 3 部構成になっており（次ページの章構成を参照）、多摩丘陵（地域）の多面的な地理学的見方・考え方が示されているとともに、野外調査や地理学の学びを深めるための方法について平易に解説がなされている。

地理学教室のスタッフの総力を集めて出版された市販本は、地理学教室開設後初の試みのものでもあった。



<章構成>

はじめに

(国土舘大学文学部地理学教室)

第Ⅰ部：多摩丘陵の地理学的見方・考え方

1. 地理学的見方・考え方とは？ (内田順文)
2. 関東地方の山地と丘陵そして平野ー地形学から見る・考えるー (長谷川均)
3. 丘陵地の気候環境ー気候学から見る・考えるー (野口泰生)
4. 多摩丘陵の植生ー植生地理学から見る・考えるー (磯谷達宏)
5. 交通路の歴史の変遷ー歴史地理学から見る・考えるー (岡島 建)
6. アニメ作品に描かれた農村と里山の風景
ー人文主義地理学から見る・考えるー (内田順文)
7. 多摩地域の都市開発と土地利用ー経済地理学から見る・考えるー (加藤幸治)
8. 多摩地域の都市農業の多面的役割
ー農業地理学から見る・考えるー (宮地忠幸)

第Ⅱ部：野外調査入門

1. 野外調査の必要性和留意点 (宮地忠幸)
2. 地形図の利用 (加藤幸治)
3. フィールドノートの活用法 (長谷川均)
4. 景観写真の撮り方 (磯谷達宏)
5. レポートの書き方 (加藤幸治)

第Ⅲ部：多摩丘陵の景観と土地利用

1. 景観写真から見た多摩丘陵の変遷 (加藤幸治・野口泰生・宮地忠幸)

あとがき

(国土舘大学文学部地理学教室)

13. 日本地理教育学会 全国地理学専攻生卒業論文発表大会発表者

年度	回	発表者	発表タイトル
1979	28	川崎 寛典	高知県の県民性
1984	33	石原 直樹	静岡県福田町の別荘・コールド繊維物業にみられる地場産業の経営基盤
1985	34	大場 靖之	地方小都市の消費者行動と小売商業構造の分析—茨城県鉾田町の場合—
1987	36	神尾 新	千葉県銚子漁港の経営基盤
1988	37	石山 貴峰	最上川中流部、荒砥峡谷の河岸段丘形成について
1989	38	高橋 敦	神奈川県大磯丘陵東部における吉沢期の古植生
1990	39	篠原 直樹 伊沢 慎一	石垣島東岸轟川下流および河口域における赤土流出 高齢化社会における老人福祉施設の現状とその考察：東京都町田市、多摩市、八王子市の場合
1991	40	斉藤 出 三枝 茂	インサングの骨格から推定したサンゴ礁内の環境：南西諸島石垣島を例にして 関東山地南部六本木峠～丸川峠周辺における岩塊流の成因について
1992	41	佐々木 明彦	三国山地平標山の冬季風背側斜面にみられる有機質土壌の生成開始期・変異期からみた斜面環境の変遷
1993	42	前田 真太郎 鈴木 英樹	奥秩父・秩山～国師ヶ岳における縞枯れ現象の主因 東京近郊電車の鉄道イメージ：その形成要因と構造
1994	43	石崎 裕 村松 篤盛	明石山脈東部山伏岳付近の線状凹地・山頂小起伏面の特徴と成因について 三重県における帰属意識からみた地域区分—三重県は東海か関西か—
1995	44	茂木 真佐美 長島 功男	麦作儀礼と麦製品儀礼食：東京都武蔵村山市周辺を例に 南岸低気圧がもたらす積雪の地域特性：関東地方を例に
1996	45	天井澤 暁裕 中島 亮	根室半島豊里におけるアースハンモックの形成環境 衛星データを用いた石垣島轟川流域における赤土流出域の検出—植生・土地被覆・表層地層などを考慮に入れた土壌環境評価—
1997	46	大石 秀行 横山 美和子	埼玉県秩父山地大霧山斜面における夜間気温の特性とその発生頻度について 幕末から明治初期における横浜のイメージについて—横浜浮世絵をテキストとして—
1998	47	金子 滋幸 星野 知大	ランドサットデータによる中国内モンゴル自治区奈曼周辺の砂漠化程度の評価 スギ人工林の施肥方法の違いが林床植生と土壌に与える影響について
1999	48	高橋 秀和	GISを使った江戸の土地利用の復元と経年変化の抽出
2000	49	渡辺 満寿子 旭立 由香	多摩ニュータウン居住者による居住環境評価について—多摩市永山地区および八王子市南大沢地区の事例— 世帯のライフステージ進行に伴う既婚女性の余暇活動について
2001	50	溝辺 貴彦	飯豊山北西部玉川源流部の氷河の認定
2002	51	鈴木 敬子 白井 清太郎	活断層トレンチ調査壁面を用いた断層変位地形の復元 都市公園における利用者の行動—代々木公園を事例として—
2003	52	戸塚 裕一 福島 克	大規模住宅団地における気温分布とヒートアイランド強度について—埼玉県南東部三郷団地を例に— 埼玉高速鉄道線開通による沿線地域への影響
2004	53	西 菜保美 牛木 拓真	青梅街道沿いにおける建築物スカイラインの形成要因 東京都草花丘陵における谷頭凹地の樹種構成の特徴
2005	54	藤田 泰文 東野 雅俊	常緑針葉樹人工林内に侵入した落葉林冠木の分布・組成およびその成立過程と機能について 校歌からみた川崎市の地理的イメージ
2006	55	橋本 紗代子 大矢 康一	九州北部の歴史的町並みにおける観光客のイメージ 東京都におけるコミュニティバスの現状と課題—杉並区・西東京市を事例として—
2007	56	野澤 健大 原田 隼	分布限界域における竹林の分布とその拡大状況 台東区におけるマンガ喫茶の立地展開
2008	57	岩崎 慶太 池田 雄斗	茨城県北部の照葉樹林分布限界域における二次林の分布および組成と構造について 奈良県明日香村における「ふるさと」演出と古都飛鳥観光の真正性
2009	58	飯塚 正樹 福島 清	硫黄岳（薩摩硫黄島）におけるガリー侵食の経年変化—1946年から2007年までのオルソ空中写真による分析— 首都圏における鉄道利用客数の変化と郊外都市の発展
2010	59	盧 娜 古山 晴香	秋葉原におけるソフトウェア企業の立地と中国系ソフトウェア企業の特徴 近年におけるファミリーレストランの立地展開—千葉県を中心に—
2011	60	緑川 達也 門田 和也	東京大都市圏におけるヒートアイランド強度 埼玉県中央地域における銭湯とスーパー銭湯の共存
2012	61	志村 衛 上原 悠輔	銚子市におけるキャベツ産地の存続メカニズム 中山間地域における特産品開発の展開とその地域的意義—島根県松江町桑茶生産組合の取り組みを事例として—
2013	62	浪床 祐貴 高橋 理奈子	筑豊地方の鉄道網の形成とその変遷 過疎指定市町村の地域的変化と「脱過疎」要因の分析
2014	63	佐川 将希 長谷川 玲大	東京都練馬区におけるカラス類の営巣木の分布とその周辺環境 認知地図に基づく東京の山の手と下町の範囲
2015	64	近藤 健 中根 敏江	千葉県野田市における風水害対応避難場所と避難経路の検討 飼料用米生産における普及の地域性と地域農業における意義—栃木県鹿沼市を事例に—
2016	65	西山 智 伊邊 明里	関東地方中南部におけるスギ（ <i>Cryptomeria japonica</i> ）衰退の現状とその要因 CSR活動の多様化と企業との交流による地域づくりの意義—JTと陸前高田市の取り組みを事例に—

資料：日本地理教育学会『新地理』各巻1号を参考に編集。

注：2016年度は、日本地理教育学会への発表エントリーデータより転載。

14. 社会科教員のための地理ワークショップ

地理学教室では、2001年から社会科教員のための地理ワークショップを開催している。この取り組みを始めたきっかけは、全国的な受験生減少とそれに呼応するように、地理学の看板が次々と塗り替えられる日本の地事情にあった。中等教育の地理教育をなおざりにして大学地理学科の活性化はないという認識である。そして、地理教育の現場の先生方と接点を持ち、悩みを共有したいという思いがあった（野口、2006）。

開催期間は、高等学校や中学校が夏季休暇となる7月下旬頃を設定している。2013年度までは2日間の日程で開催されてきたが、参加者アンケート（毎年、ワークショップ終了時に参加者へ回答をお願いしている）において1日開催の方の希望者が増えてきたことから、2014年度より1日開催が続いている。

テーマは、参加者アンケートを参考に、12月頃から企画幹事によって原案が示され、数か月にわたって検討が続けられる。3月頃には講師の検討と運営幹事が選定され、4月以降古今書院の「地理」や日本地理学会の機関誌「地理学評論」や日本地理学会のホームページへの掲載、日本地理教育学会や地理教育研究会、全国地理教育研究会への会告文書を送ること、情宣を図っている。また、運営幹事は、当日のテキスト編集の業務にもあたっている。

以下に示す内容が、これまでの地理ワークショップのテーマと実施内容である。ここには記していないが、毎年、企画幹事と当日の運営幹事が、地理学教室の専任教員によってほぼ持ち回りで担われている。また、当日の運営には大学院生の助力も得てきた。

- 2001 私たちの町の環境を宇宙から調べる (2001年7月26日～7月27日)
講師：長谷川 均 参加者数：17名
- 2002 GISの世界 (2002年7月25日～7月26日)
講師：長谷川 均・加藤幸治・磯谷達宏 参加者数：29名
- 2003 地域調べの方法を探る (2003年7月29日～7月30日)
講師：磯谷達宏・野口泰生・岡島 建・加藤幸治 参加者数：21名
- 2004 授業で使える衛星データ無償ソフトで作るRS画像—
(2004年7月27日～7月28日)
講師：長谷川 均 参加者数：23名
- 2005 江戸・東京の神話的空間と映画の中の場所の意味
(2005年7月26日～7月27日)
講師：内田順文 参加者数：16名
- ※台風の接近の影響で、内容を変更。

- 2006 ヨーロッパ地誌をどう教えるか (2006年7月27日～7月28日)
 講師：野口泰生、長島弘道、内田順文、加藤幸治、長谷川裕彦 (国士舘大・非)
 参加者数：20名
- 2007 BRICs 諸国の現在 (2007年7月26日～7月27日)
 講師：磯谷達宏、小俣利男 (東洋大)、シャルピン・デニス (東洋大・院)、
 鍛塚賢太郎 (琉球大)、上野和彦 (東京学芸大) 参加者数：44名
- 2008 北アメリカ 多様な自然と社会 (2008年7月29日～7月30日)
 講師：長谷川 均、東郷正美 (法政大)、高柳長直 (東京農業大)、
 山本大策 (Central Michigan Univ.) 参加者数：53名
- 2009 環境問題を「グローバル」にみる・考える (2009年7月24日～7月25日)
 講師：磯谷達宏、山添 謙 (日本大)、伊藤達也 (法政大)、内田順文、
 宮地忠幸、長谷川 均、岡島 建、加藤幸治 参加者数：40名
- 2010 ちり散歩ー国士舘スタッフが案内する最近の地理学の話題ー (2010年7月30日～7月31日)
 講師：内田順文、長谷川 均、磯谷達宏、加藤幸治、宮地忠幸
 参加者数：25名
- 2011 アフリカ地誌の授業をどう創るか? (2011年7月29日～7月30日)
 講師：嶋田義仁 (名古屋大)、長谷川 均、野口泰生、磯谷達宏
 参加者数：29名
- 2012 アジアの地域区分を考える (2012年7月31日～8月1日)
 講師：内田順文、磯谷達宏、宮地忠幸、岡島 建、加藤幸治
 参加者数：33名
- 2013 私の授業紹介ー大学教員の地理学教育の今ー (2013年7月31日～8月1日)
 講師：野口泰生、磯谷達宏、内田順文、加藤幸治、岡島 建
 参加者数：15名
- 2014 地理の目で見ると南の島・沖縄 (2014年7月26日)
 講師：長谷川 均、中井達郎 (国士舘大・非)、
 柴田 健 (元神奈川県立高等学校教諭) 参加者数：40名
- 2015 地図でみる・学ぶ世田谷 (2015年7月26日)
 講師：長谷川 均、野々村邦夫 (日本地図センター) 参加者数：22名
 (内、世田谷区民2名)
- 2016 災害の地理を考える (2016年7月30日)
 講師：鈴木毅彦 (首都大学東京)、小関勇次 (東京家政大学・非)
 参加者数：24名

開始から数年間は、リモートセンシングや GIS、そして調べ学習の方法など、スキルの習得を中心としたワークショップが展開された。その後、2006 年度頃からは地誌学習にかかわるワークショップが多いといえる。この頃から、テーマ内容に精通する講師を招くことも多くなった。地理（学）学習にとって重要な位置づけとなるフィールドワークは、第 9 回（2009 年度）において多摩丘陵をめぐる日帰り巡検が行われたり、第 10 回（2010 年度）で大学周辺のミニ巡検が行われたりした。また、大学における地理学教育の内容を意識的に示すことで、高校や中学校における地理教育の接点を探るワークショップも行われた（例えば、2010、2013 年度）。また、2015 年度には初めて世田谷区民にも参加者を募った。「社会科教員のための地理ワークショップ」から「市民のための地理ワークショップ」も視野に入れた取り組みにするかどうか、悩みながら開催したワークショップであった。

毎年、専攻会議の中で地理ワークショップの意義や役割について多くの議論が交わされている。高等学校における地理の必修化が決まった今日、改めてこの取り組みの開催経緯を再確認するとともに、社会科教員のための地理ワークショップとして「地理好き」を増やすための地道な取り組みが求められているように思われる。

【参考文献】

- ・野口泰生 2006. 地理学の宿命とアメリカ地理学会の試み

ー本学地理・環境専攻主催「地理ワークショップ」立ち上げで考えたことー.

国士舘大学地理学報告 14 : 1-22.



写真 1. 地理ワークショップの講義の一コマ
(2015 年 7 月 : 第 15 回)

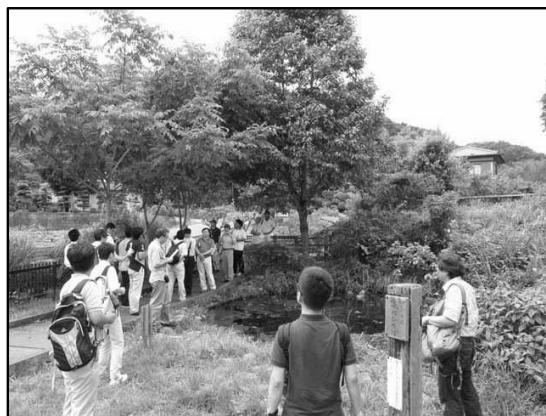


写真 2. 多摩丘陵のエクスカージョン
(2009 年 7 月 : 第 9 回)

15. 国土館大学地理学会 学会誌

1) 地理学会誌

第1号 (1979年3月)

- ・岩田孝三：地理学の思い出.
- ・池田雅博・田中 悟・千葉清和・秦 道夫：
金沢市における都市開発と環境保全をめぐる諸問題.

第2号 (1980年3月)

- ・浅井得一：地理学徒の覚え書き.
- ・加藤久幸・増井克行・宮本美代子：石川県における
伝統工芸産業の経済地理概報.

第3号 (1982年12月)

- ・八久保厚志：熊本県南部地方の焼酎製造業在来産業の存在形態.
- ・武田裕一：保倉川下流部の段丘地形.

第4号 (1984年3月)

- ・国土館大学地理学会沼津巡検班：沼津市商店街のイメージ調査報告書 第1報：
昭和58年度調査.

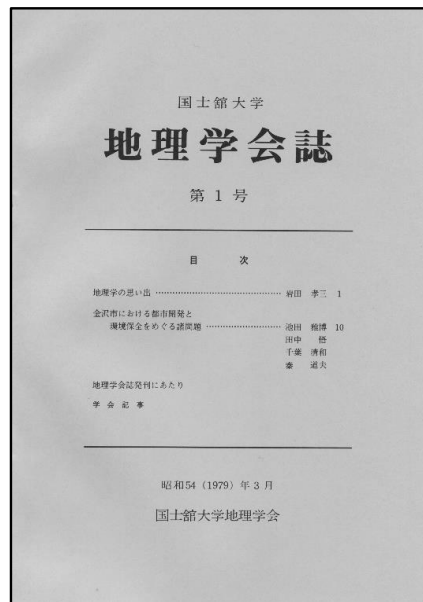
第5号 (1986年3月)

- ・国土館大学地理学会沼津巡検班：沼津市仲見世商店街パーソントリップ調査報告書
沼津市商店街調査 第2報：昭和59年度調査.

第6号 (1991年3月)

- ・国土館大学地理学会沼津巡検班：沼津市グルメ街道調査報告書
沼津市商店街調査 第3報：1986、87年調査.

※第6号で廃刊、以後「国土館大学地理学報告」に統合・改題した。



2) 国土館大学地理学報告

第1号 隔年刊 (1990年)

- ・ Yasuo Noguchi : Observation of Evaporation by Unconventional Methods in Hawaii : Small Cans and Piche Evaporimeters.

(国土館大学文学部人文学会紀要 第21号掲載)

- ・ 大崎 晃 : 大戦後における焼津鯉漁業経営体の変容と昭和漁業株式会社.

(国土館大学文学部人文学会紀要 第22号掲載)

第2号 隔年刊 (1992年)

- ・ 長谷川均 : サンゴ礁地形判読のための LANDSAT カラー合成画像の検討.

(国土館大学文学部人文学会紀要 第23号掲載)

- ・ 長島弘道 : ハンガリーの都市近郊地域における最近の変容—ガーデンを中心として—.

(国土館大学文学部人文学会紀要 第24号掲載)

第3号 隔年刊 (1994年)

- ・ 瀬戸玲子 : 産業大分類別就業者構成比の変化—1965~1985年の関東地方を中心に三角ダイアグラムを利用した地図作成による考察—.

(国土館大学文学部人文学会紀要 第25号掲載)

- ・ 内田順文 : 比喩的認識と場所イメージ.

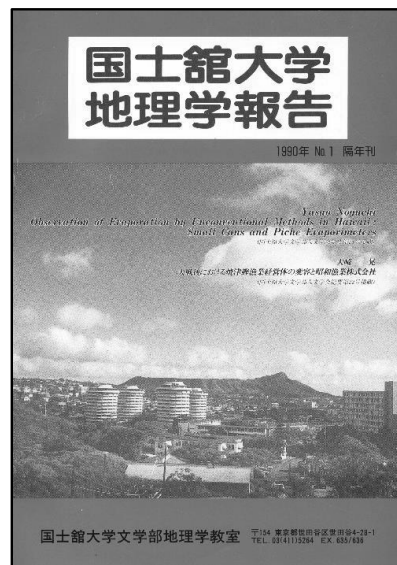
(国土館大学文学部人文学会紀要 第26号掲載)

第4号 年刊 (1995年)

- ・ 瀬戸玲子・二見昭宏 : 関東地方における集団住宅建設の経年変化と立地条件.
- ・ 石崎 裕 : 赤石山地東部山伏岳付近の線状凹地・山頂小起伏面の特徴と成因について.
- ・ 林田泰文 : 「湘南」イメージにみる空間認知について.
- ・ 1994年度 卒業論文 題目一覧

第5号 年刊 (1996年)

- ・ 内田順文 : 宮崎駿『風の谷のナウシカ』にみる「自然-人間」観と現代人の地球環境観について.
- ・ 長尾竜太郎 : 焼岳足洗谷における堆積土石の分布とその移動過程.
- ・ 茂木真佐美 : 民俗事象への多面的アプローチの試み.— 東京都武蔵村山市・岸の粉食を例に一.
- ・ 1995年度 国土館大学地理学専攻 卒業論文主題一覧



第6号 年刊 (1997年)

- ・野口泰生：気温極端年における夏日・真夏日・熱帯夜・冬日・真冬日の分布について
—関東甲信越地方とその周辺地域を中心に—.
- ・天井澤暁裕：根室半島におけるアースハンモックの形成環境と分布形態.
- ・中島 亮：衛星データを用いた石垣島轟川流域における赤土流出域の検出
—植生・土地被覆・表層地質などを考慮に入れた土壤環境評価—.
- ・1996年度 国土館大学文学部地理学専攻 卒業論文主題一覧

第7号 年刊 (1998年)

- ・長谷川均・長谷川明雄：琉球列島石垣島白保サンゴ礁でみられるマイクロアトールの特徴.
- ・横山美和子：幕末から明治初期にかけての横浜のイメージの変化.
- ・大石秀行：埼玉県外秩父山地大霧山斜面における夜間気温の特性と
その発生頻度について.
- ・1997年度 国土館大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

第8号 年刊 (1999年)

- ・磯谷達宏・石本研：伊豆半島西部の稜線付近におけるササ草原の分布とその変容.
- ・星野知大：スギ人工林の施行方法の違いが林床植生と土壤に与える影響について.
- ・1998年度 国土館大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

第9号 年刊 (2000年度)

- ・沖津 進：北日本の主要な森林の北東アジアにおける植生地理学的位置づけ.
- ・高橋秀和：GISを使った江戸の土地利用変化と経年変化の抽出.
- ・大高寛幸：横浜市におけるコンビニエンスストアの立地展開.
- ・1999年度 国土館大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

第10号 年刊 (2001年度)

- ・岡島 建：世田谷の歴史地理に関する一考察.
- ・旭立由香：世帯のライフステージ進行に伴う既婚女性の余暇活動の変化.
- ・渡辺満寿子：多摩ニュータウン居住者による居住環境評価について
—多摩市永山地区および八王子市南大沢地区の事例—.
- ・2000年度 国土館大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

第11号 年刊 (2002年度)

- ・長島弘道：1989年変革後のハンガリーにおける農業の展開と農村の変容.
- ・溝邊貴彦：飯豊山地、玉川源流部の氷河地形と氷成堆積物.
- ・2001年度 国土館大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

第12号 年刊 (2003年度)

- ・加藤幸治：1990年代後半における日本の産業別従業者数の地域的動向.
- ・白井清太郎：都市公園における利用者の行動—代々木公園を事例として—.
- ・鈴木敬子：活断層トレンチ調査結果を用いた埋没断層変位地形の三次元的把握—3D-CADによるシュミレーションと実例—.
- ・後藤智哉：陸地測量部作成旧版地形図の幾何補正について—沖縄本島2万5千分の1地形図を例に—.
- ・2002年度 国士舘大学大学院 地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2002年度 国士舘大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

第13号 年刊 (2004年度)

- ・内田順文：中国・四国・九州地方における都市の観光イメージについて—観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み—.
- ・戸塚裕一：大規模住宅団地における気温分布とヒートアイランド強度について—埼玉県南東部三郷団地を例に—.
- ・加藤幸治・野口泰生：2004年度国際大学交流セミナー（中国文化大学）に関する報告と覚書.
- ・2003年度 国士舘大学大学院 地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2003年度 国士舘大学地理学専攻 卒業論文題目

第14号 年刊 (2005年度)

- ・野口泰生：地理学の宿命とアメリカ地理学界の試み—本学地理・環境専攻主催「地理ワークショップ」立ち上げで考えたこと—.
- ・牛木拓真・磯谷達宏・長岡綾子：東京都草花丘陵における谷頭凹地のコナラ二次林の特徴—隣接する上部谷壁斜面の群落と比較して—.
- ・清水記久：遠州横須賀城下町の変遷過程と地域構造.
- ・2004年度 国士舘大学大学院 地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2004年度 国士舘大学地理学専攻 卒業論文題目

第15号 (2006年度)

- ・磯谷達宏・樋口健太郎：八ヶ岳西岳南西斜面における管理放棄型カラマツ植林の組成と構造.
- ・本多奈美子：コンビニエンスストアの立地地点と取扱商品—武蔵野市に立地するCVSと国道20号線沿いに立地するセブンイレブンを事例に—.
- ・藤田泰文：神奈川県丹沢山麓のスギ・ヒノキ人工林に侵入した広葉樹林冠木を含む群落の組成と立地環境特性.
- ・後藤智哉：DSMおよびオルソフォト作成に空中写真のスキャン条件が与える影響.
- ・2005年度 国士舘大学大学院地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2005年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第16号 (2007年度)

- ・野口泰生：長島先生を送ることば 長島弘道先生の研究業績.
- ・長島弘道：国際地理学連合 農業・農村関係委員会の会議（1976—2006）に参加して.
- ・岡島 建・大矢康一：コミュニティバス運行の現状と課題
—東京都杉並区および西東京市の事例を中心として—.
- ・内田順文：風景としての武蔵野—国木田独歩『武蔵野』を読む.
- ・加藤幸治：2000年の日本における職業別就業者の地域的展開
—都道府県別データからの分析—.
- ・堀江克浩：高校地理授業における作業的・体験的学習の事例.
- ・小堀貴亮：東北・九州地方における湯治場の機能変化.
- ・相馬拓也：形象なき文化遺産としての狩猟技術
キルギス共和国イシク・クル湖岸における鷹狩猟のエスノグラフィ.
- ・橋本紗代子：九州北部の歴史的町並みにおける観光客のイメージ.
- ・長島弘道・長谷川均：デラサール大学との国際交流セミナー報告.
- ・2006年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第17号 (2008年度)

- ・藤田泰文・長谷川均・後藤智哉：光源と測定環境が樹木単葉の分光反射特性に与える影響.
- ・原田 隼：東京都台東区におけるマンガ喫茶の立地展開.
- ・小池友恵：作家、三浦綾子が描いた北海道—故郷としての場所と信仰を深める場所—.
- ・保谷忠男：IPCCの主張する地球温暖化論の問題点について
—気温変動と大気中のCO₂に焦点をあてて—.
- ・2007年度 国士舘大学大学院地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2007年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第18号 (2009年度)

- ・岡島 建・宮下智宏：1920年代における局地鉄道の計画と建設
—山形県村山地方を事例にして—.
- ・岩崎慶太・磯谷達宏：茨城県北部の照葉樹林分布限界における二次林の分布および
組成と構造について.
- ・西潟秀平：秀吉系大名によるヨコ町型城下町の建設—池田輝政を事例に—.
- ・池田雄斗：奈良県明日香村における「ふるさと」演出と古都飛鳥観光の真正性.
- ・山口史枝：中部山岳亜高山帯における主要針葉樹分布域の温度領域.
- ・2008年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第19号 (2010年度)

- ・宮地忠幸：中山間地域における特産品開発の地域的意義に関する一考察
—阿武隈高地における桑の特産品開発を事例として—.
- ・福島 清：首都圏における鉄道利用客数の変化からみた都市構造変化.

- ・飯塚正樹：薩摩硫黄島におけるガリー侵食の経年変化
—1946年～2007年までのオルソ空中写真による解析—
- ・内田順文・池田雄斗：2010年度海外巡検（国際大学交流セミナー「中国遼寧省・河北省の都市と文化遺産」）に関する報告。
- ・2009年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第20号（2011年度）

- ・加藤幸治：立地係数からみた現在の日本における地域構造の特徴
—「農工業県」に関する分析を中心として—
- ・小坂真耶：東限におけるイヌガシ (*Neolitsea aciculata*) 個体群の分布とその生育環境。
- ・盧 娜：秋葉原におけるソフトウェア企業の立地と中国系ソフトウェア企業の特徴。
- ・2010年度 国士舘大学大学院地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2010年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第21号（2012年度）

- ・加藤幸治・鋤塚賢太郎・加藤和暢：ドクターヘリ導入による「15分アクセス圏」の拡大
—運航制約を考慮した効果把握のための覚書—
- ・門田和也：埼玉県中央地域における銭湯とスーパー銭湯の共存。
- ・梁 国響：賑わいのある商店街の現状—新小岩駅前ルミエール商店街の事例—
- ・保谷忠男：海面水位の変動と地球温暖化論。
- ・宮地忠幸：大学生による体験を通じた農業・農村学習
—2009・2010年度の活動記録と事後評価—
- ・2011年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第22号（2013年度）

- ・大野 勲・内田順文 大岡昇平：『武蔵野夫人』の舞台に関する地理学的考察
—「はげ」の家の位置をめぐって—
- ・長谷川均：UAV（自律型飛行体）を使った高解像空中写真の撮影と活用
—サンゴ礁浅海域での事例—
- ・長谷川裕彦・青山雅史・佐々木明彦・増沢武弘：
南アルプス、荒川三山南面圏谷群における
最終氷期以降の氷河・周氷河地形発達史。
- ・川崎遼平：地方ローカル鉄道の上下分離に伴う変容と地域住民
—伊賀市・伊賀鉄道を事例に一—
- ・志村 衛：銚子市におけるキャベツ産地の存続メカニズム。
- ・2011年度 国士舘大学大学院地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2012年度 国士舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第23号（2014年度）

- ・加藤幸治：ドクターヘリ出動目的の地域的差違とその示唆
—道東ドクターヘリの運航実績に注目して—.
- ・佐々木明彦：蔵王火山の亜高山帯における気温の通年観測.
- ・古山晴香・加藤幸治：近年におけるファミリーレストランの立地展開—千葉県を中心に—.
- ・2013年度 国土舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第24号（2015年度）

- ・長谷川均：野口泰生先生と地理学教室 野口先生の略歴と研究業績.
- ・野口泰生：中信高原霧ヶ峰の南風.
- ・野口泰生：国土舘大学地理・環境専攻学生の26年（1990～2015）
変わったものと変わらなかったもの.
- ・鈴木柚里奈：青山通りにおけるネイルサロンの立地とその料金の地域差.
- ・長谷川玲央：認知地図に基づく東京の山の手と下町の範囲.
- ・2014年度 国土舘大学大学院地理・地域論コース 修士論文要旨
- ・2014年度 国土舘大学地理・環境専攻 卒業論文題目

第25号（2016年度）

- ・磯谷達宏：ヨルダンの森林植生概観
—‘Vegetation of Jordan’に記載された情報を中心に—.
- ・佐々木明彦・河島克久・松元高峰・伊椽部勉・倉元隆之・鈴木啓助：
蔵王火山亜高山帯のオオシラビソ林における積雪グライドの観測.
- ・中根敏江：日本における飼料用米生産の普及とその地域的意義
—栃木県鹿沼市を事例に—.
- ・鈴木貴子：静岡県沼津市における宿泊業の新陳代謝.
- ・近藤 健：千葉県野田市における風水害対応避難場所と避難経路の検討.
- ・2015年度 国土舘大学地理・環境専攻卒業論文題目

16. 国土館大学地理学会講演・研究発表会

1982 年度

1 月・研究発表会

- ・1 年生：大月・相模原巡検報告.
- ・2 年生：萩焼の現状—地場産業的萩焼と伝統的萩焼—.
- ・3 年生：琵琶湖の治水とその計画.
- ・4 年生：熊本県南部の酒造業と地域性.

1985 年度

5 月・講演会

- ・大崎 晃：(表題不明)

1988 年度

5 月・講演会

- ・長谷川 均：ランドサット MSS データによるサンゴ礁の画像解析.

12 月・講演会

- ・小倉 眞：大都市近郊農業地域における農業経営対応.
ゼミ発表
(発表者・表題不明)

1989 年度

5 月・講演会

- ・長島弘道：カナダの都市と農村.

12 月・講演会

- ・太田晃瞬：越後における「親鸞」周辺と地域性—特に精神的影響への可能性試論—.
ゼミ発表
(発表者・表題不明)

1990 年度

5 月・講演会

- ・小川英文：フィールドワークについて.

12 月・講演会

- ・清水長生：日本の氷河地形研究.
ゼミ発表
- ・辻 直樹：塩釜市における蒲鉾生産の現状と問題点.
- ・小淵禎男：大和郡山市における金魚養殖.
- ・石崎章治：下伊那郡松川町における和なし栽培の特色とその経営構造.

- ・長久保達郎：霧ヶ峰高原における微地形の影響による風の分布について.
- ・三枝 茂：千葉県養老川流域の河岸段丘地形について.

1991 年度

5 月・講演会

- ・内田順文：地理的イメージについて.

12 月・講演会

- ・許 衛東：雲南の少数民族の土地利用と生活.
ゼミ発表
- ・佐藤浩士：諏訪湖流入河川の水質分布について.
- ・谷口雄介・七沢智憲：千葉県養老川中流における河岸段丘の分布と構成物.
- ・海老沢尚：甲府盆地南部の水害と対策.
- ・添田智則：長野県長野市の人口の転出転入から見た他県との関わりについて.
- ・野本幸男：浜松市庄内地区における花き生産の発展.

1992 年度

6 月・講演会

- ・瀬戸玲子：自動図化、GIS（地理情報システム）.

12 月・講演会

- ・水野一晴：卒業論文（20 代前半に書く論文）はなぜ重要か？大学生だからこそできる地理学.
ゼミ発表
- ・石崎 裕：信濃川中流域で見られる河岸段丘とその堆積物について.
- ・高橋 誠：河口湖北西岸連続入り江におけるヨシ群落の分布形成要因.
- ・野田治夫：鳥屋野潟における都市化と水質汚濁の関係.
- ・松林 亮：名古屋市久屋大通り・広小路通りにおける景観の統一性とその特徴.
- ・伊藤恵喜：長野市中心部の時間貸駐車場の現状と変遷.

1993 年度

6 月・講演会

- ・澤口晋一：氷河地形（スピッツベルゲン調査紀行）.

12 月・講演会

- ・瀬戸玲子：新疆ウイグル自治区見聞録.
ゼミ発表
- ・大鹿公徳：岐阜県高山市における都市の形態と昇温率との関係.
- ・石川太郎：福島県会津郡田島町赤穂原川流域の土地利用と水質の関係.
- ・田村寛子：地方都市におけるコンビニエンスストアの現状と
その周辺のココンビニエンスストアの配送ルートについて.
- ・村松篤盛：京都市内における京都弁の使用頻度および地域的差異について.
- ・安達達志：神戸市におけるスポーツ政策—スポーツ政策による都市構造の変化—.

1994 年度

5 月・講演会

- ・長島弘道：マニラ・ケソン 9 日間.

12 月・講演会

- ・高木 正：アパルトヘイト後の南ア共和国の生活.

ゼミ発表

- ・白井英明：埼玉県秩父市におけるヒートアイランドの発生要因について.
- ・白男川里子：会津田島におけるリモートセンシングデータと
分光反射特性の整合性について.
- ・窪木俊夫：長野市における傾斜地の住宅利用について.
- ・石井崇伸：手描き地図からみた小学生の知覚環境の発達.
- ・榊原清史：新潟市街地における都市地下空間利用 電線類の地中化
一万代一丁目地下歩道を例として一.

1995 年度

6 月・講演会

- ・東郷正美：1995 年度兵庫県南部地震について
一現地における地形、地質調査にもとづいて一.

12 月・講演会

- ・長沢利明：台湾の少数民族.

ゼミ発表

- ・萩原 勇：仙台駅東地区の再開発.
- ・関口貴則：小名浜における海霧の増加と気温・海水温との関係について.
- ・本田慎吾：前橋市郊外におけるロードサイド店の立地・性格.
- ・深代雅明：長野県伊那盆地中部域における地形形成一テフラ層から見た地形分類一.
- ・瀧澤賢治：北海道観光ルート上の札幌市における観光拠点生による純観光地性評価の
相対的低下.

1996 年度

6 月・講演会

- ・三枝 茂：第 37 次南極地域観測隊夏隊のフィールドワーク
一とくに地理学の調査を中心に一.

12 月・講演会

- ・八久保厚志：工業地理学と地域産業政策.

ゼミ発表

- ・佐々木徹：山梨県白根町の直売と観光農業について.
- ・塩沢隆幸：福島県福島市におけるヒートアイランドの発生とその要因について.
- ・後藤和美：福島県福島市における高齢者社会福祉施設の分布.

- ・長竹直樹・志村鋼志・稲見悟志：

六甲山地断層系の観察による六甲山地の地形形成の考察。

- ・金井 宏：兵庫県芦屋市における鉄道利用について一阪急・J R・阪神を比較して一。

1997 年度

5 月・講演会

- ・岡島 建：近代都市における河川水運の役割。

12 月・講演会

- ・門村 浩：アフリカ・サヘル地方の砂漠化。

ゼミ発表

- ・小笠原洋介：豊田市の発展とトヨタ自動車。
- ・吉田正光：千葉県銚子市における気候的特性。
- ・若井里江子：“沖縄県民”と“観光客”の沖縄に対するメンタル・マップの違いについて。
- ・金子滋幸：道東地方で観察されたさまざまな地形。
- ・小棚木いずみ：大阪府における新しい水辺空間づくりーため池オアシス構想を例に一。
- ・庄田哲夫：仙台市泉区の都市公園の整備と都市開発ー七北田公園と泉パークタウン紫山地区を例に一。

1998 年度

5 月・講演会

- ・磯谷達宏：照葉樹林帯における自然林と二次林。

12 月・講演会

- ・山村順次：観光地理学の現状と課題。

ゼミ発表

- ・小林和幸：会津若松市における商店街の立地ー神明通り商店街と本町中央商店街を比較して一。
- ・佐藤久美子：茨城県鹿島郡旭村における海岸部と内陸部の気温差について。
- ・伊藤嘉彦：岩手県内各都市の観光イメージについて。
- ・加藤 譲：房総半島南端平磯における完新世地形についてー海岸段丘と海岸砂丘の特徴一。
- ・大高寛幸：新潟市におけるコンビニエンスストアの立地展開。
- ・小山 裕：伊豆半島天城山のブナ林の構造と動態。

1999 年度

6 月・講演会

- ・市川清士：完新世後期の海水準変動を追うーサンゴ礁域からの検証一。

10 月・講演会

- ・Iraphne Childs：オーストラリアの災害。

12月・講演会

- ・椿真智子：近代日本のフロンティアとモダニティー文化景観としての近代開拓農場―ゼミ発表
- ・国分光平：愛媛県内子町における歴史的町並み保存の現状と展望.
- ・吉沢雄宇：松本市における相対湿度とその永年変化における低下現象について.
- ・青木直美：房総半島南部・平磯における完新世海岸段丘の比較研究.
- ・菅野江梨子：子供の知覚環境とその構造について
―豊中市立小曾根小学校3年生を事例に―.
- ・武田晃一：岡山市におけるデイリーリズムと岡山駅・満点屋バスターミナルの比較
―岡山市内のバス事業を中心に―.
- ・秋山純衣：伊豆半島南部の植生―照葉樹林を中心に―.

2000年度

6月・講演会

- ・長谷川裕彦：卒論私考―大学で何を学ぶか？―.

12月・講演会

- ・福島義和：世界都市ロンドンにおけるエスニックマイノリティについて.
ゼミ発表
- ・藤井謙太郎：小名浜における気温の分布と考察―ヒートアイランドは存在するか―.
- ・溝辺貴彦：沖縄県石垣市白保海岸の赤土体積量について
―海藻・海草帯と海浜との比較―.
- ・木村真理子：伊豆半島南部の照葉樹二次林について.
- ・小島穂高：広島県豊田郡瀬戸町におけるみかんとレモンの栽培形態と
その関係について.
- ・山田宏幸：和歌山県那賀郡貴志川町における鉄道開通による影響と変化.
- ・古村勇一：子どもの遊び空間とメンタルマップ―都市部と農村部の比較を中心に―.

2001年度

6月・講演会

- ・加藤幸治：日本におけるサービス経済化の展開と地域経済開発.

12月・講演会

- ・土谷敏治：都市における公共交通の課題と展望―ドイツの事例を中心に―.
ゼミ発表
- ・藤原裕子：房総半島千倉町の土地利用の変化と防災.
- ・石田 樹：福島市内の気温観測における定点観測の意義について.
- ・小関英治：しなの鉄道の現状と今後の課題.
- ・三橋和則：伊豆半島南部における水田放棄地の植生について.
- ・佐藤洋平：大和郡山市における金魚養殖経営の推移.
- ・白井清太郎：周辺住民からみた札幌市中島公園の利用と必要性.

- ・塚原愛恵：東京湾アクアラインにおける高速バスの利用状況と乗客の傾向
—通勤手段としての高速バス—。

2002 年度

6 月・講演会

- ・清水靖夫：明治初年の地図事情。

12 月・講演会

- ・目崎茂和：風水に学ぶ地理学の幸せ。

ゼミ発表

- ・今井正人：会津若松市の気温変化に与える都市・都市化の影響について。
- ・桑田裕子・池田冬大・里村絵美：
伊豆大島湯の浜、砂の浜における形成環境と海浜堆積物。
- ・星野秀明・瀧口和也：伊豆半島南部における植生景観と植生管理。
- ・池澤鉄平：静岡市—江戸期駿府城下町—の空間構造の変遷。
- ・加藤 郷：新潟における農業生産法人の経営展開。
- ・鈴木俊之：近鉄北勢線とそれを取り巻く状況。
- ・中島晶子：神戸・大阪の観光地イメージ。

2003 年度

6 月・講演会

- ・高野繁昭：テフクロノジーから見た武蔵野台地と多摩丘陵の発達史。

12 月・講演会

- ・横山秀司：ヨーロッパにおける観光と環境・景観。

ゼミ発表

- ・菊地 広：両墓制の立地条件—福井県美浜町の集落を事例として—。
- ・西 菜保美：長崎市西浦上地区における中高層建築の立地と長崎市の都市構造。
- ・菅原誠一：第3セクター鉄道の現状—阿武隈急行を事例として—。
- ・左部貴士：大阪府における生産緑地の現状と課題
—堺市・交野市を中心として—。
- ・石月拓洋：神津島北西部における斜面崩壊地の特性。
- ・中島万理絵：岐阜県高山市におけるヒートアイランド現象について。
- ・保立優子：静岡県西伊豆町における二ホンイノシシの分布と農作物被害の現状。

2004 年度

6 月・講演会

- ・大崎 晃：19 世紀アメリカ捕鯨業勃興・発展・没落
—世界史の一齣に対する地理学方法論適用の有効度に関する一考察—。

12 月・講演会

- ・中井達郎：エコツーリズムは自然にやさしい観光か？—現状と課題—。

ゼミ発表

- ・川島尚悟：新社会人から見た生活空間としての松江.
- ・小野偉子・火山地形班：噴出年代の異なる溶岩に何らかの違いは見られるか
—伊豆大島 1951、1986 年溶岩を例に一.
- ・久谷仁美：新潟県上越市における気候特性と雪対策
—特に上越市高田の風雪・風向特性—.
- ・藤田泰文：人工林内の出現種とその侵入様式について.
- ・公塚裕幸：近現代における神戸市内交通網の変容.
- ・小早川享泰：世界遺産登録された意義とその影響—日光の事例から—.
- ・嶋田悠希：苫小牧市における大型小売店舗の立地と消費者行動.

2005 年度

6 月・講演会

- ・長谷川均・後藤智哉：ヨルダン北部の自然と人々.

12 月・講演会

- ・鈴木裕之：アフリカのゲッターから
—アフリカ都市における若者たちの空間認識—.

ゼミ発表

- ・高水泰裕：和歌山県日置川における支流と本流のアユ生息地場所利用について.
- ・山中和明：会津田島町上塩江地区における崩壊跡地の現状.
- ・吉田慈美：飛騨の朝霧と気温分布.
- ・石田勇介：加古川市中心市街地における商店街の構造
—大型店立地による影響を中心に—.
- ・宇佐美誠：高知市における坂本龍馬のイメージと観光の関連性.
- ・小倉光平：秋田県大潟村における農地所有の変化とその要因.
- ・宮下智宏：山陽電気軌道の開通とその影響.

2006 年度

6 月・講演会

- ・奥山友希乃：フィリピン異文化体験.
- ・飯田真仁：ブラジルでの研修生活—Vida no Brazil—.

12 月・講演会

- ・清水靖夫：第二次世界大戦中に日本が作った地図.

研究発表会

- ・松野隆明：愛知高速鉄道東部丘陵線の乗客数の変化と沿線地域への影響.
- ・山添啓介：伊万里・有田焼産地の現状と再生計画.
- ・森田 梓・松島正信：新潟県上越市高田における降雪の特徴と雪対策・
上越市高田のヒートアイランド現象とその強度について.
- ・野澤健大：高知県新荘川流域における河辺草原.

- ・中村直貴：会津田島・針生地区阿賀野川流域における段丘地形について。
- ・小池友恵：世界遺産「グスク」の風景とオーセンティシティ。
- ・呉 亜鳴：甲府市中心部における空間利用。

2007 年度

6 月・講演会

- ・佐々木明彦：山の景観を読む。

12 月・講演会

- ・長島弘道：持続可能な農村システムに関する研究の現状と課題。
研究発表会
- ・池田雄斗：旅行者が持つ観光地のイメージの差異
—支笏湖・洞爺湖・大沼公園を事例として—。
- ・岩崎慶太：宮崎県伊比井川流域における斜面方位と地形に対応した
照葉樹二次林の構成種の違いについて。
- ・小林祐貴：津山城下町における歴史の変遷と地域構造。
- ・菅原敏春：福岡県大牟田市における鉱工業の衰退と大型商業施設が
地元商店街に与える影響。
- ・鈴木広樹：日光市今市におけるヒートアイランド現象について。
- ・竹内えり・熊倉謙・井澤雄人・塩谷貴文：
久米島における異なるタイプのサンゴ礁海岸の比較。
- ・真分純也：仙台市中心部におけるコンビニエンスストアの立地展開
—取扱商品および店舗構造を中心として—。

2008 年度

6 月・講演会

- ・宮地忠幸：低食料自給率の背景と日本農業の地域的課題。

12 月・講演会

- ・末吉健治：企業内地域間分業—経済活動の地域的差異—。
研究発表会
- ・市川拓弘：秩父盆地における地形と土地利用による気温分布への影響。
- ・数馬清宏・坂本雄太：伊豆半島南部における南・北斜面間および
異なる地質間での二次林構成種の違いについて。
- ・向後知美：福島県二本松市における有機農業の存立基盤
—旧東和町における取り組みからの考察—。
- ・佐々木貴宏：地方都市におけるプロサッカークラブの存立基盤
—大分トリニータを例に—。
- ・高野淳一朗：群馬県におけるモータリゼーションの実態と公共交通機関への影響。
- ・福島 清：敦賀港における歴史的機能変化とコンテナ貿易の実態。
- ・柳沢康二：火山岩の分光反射特性について—伊豆大島三原山を例に—。

2009 年度

6 月・講演会

- ・鈴木倫太郎：サンゴ礁環境を探る—生物侵食とサンゴ礁地図の作成—.

12 月・講演会

- ・関戸明子：グリーンツーリズムによる地域活性化.

研究発表会

- ・高橋麻里亜：沖縄県竹富島における伝統的住居と集落景観.
- ・関谷祐介：広島県三次町の二次林における小地形に対応した樹種構成の違い.
- ・関口直人：能勢電鉄における輸送現状と課題.
- ・岡田翔子：神津島の天上山における火山地形と堆積物について.
- ・古山晴香・門倉浩司・奈良場慎一：鹿児島県出水市における中心商店街の衰退要因.
- ・阿部智哉：長野県須坂市・小布施町の土地利用とヒートアイランドとの関係.
- ・中馬裕希・伊藤規貴：農山村におけるバス交通体系の再編成と地域交通問題
—岩手県北部地域を事例として—.

2010 年度

6 月・講演会

- ・品田光春：歴史地理学から見た近代新潟県の油田開発.

12 月・講演会

- ・長谷川裕彦：山に学ぶ.

研究発表会

- ・押切せかい：札幌市における風景印・駅スタンプからみる地域のイメージ.
- ・祐乗坊宏明：高知県東部奈半利地域における二次林植生の変化について.
- ・鈴木理枝：歴史的町並みの形成と保存—高山市山町筋と金屋町を例に—.
- ・春山和彦：房総半島南東岸における海成段丘の分布
—南房総市千倉町、白間津～大川にかけて—.
- ・清水達人：農業振興策としての観光農園の可能性—長野県中野市の事例—.
- ・一ノ瀬佳子：寒冬年における銚子と全国の官署の気温低下傾向について
—1945 年 2 月—.
- ・都野森貴裕・小出駿介・三浦大貴：北海道清水町における移住政策の展開と
移住者の属性.

2011 年度

6 月・講演会

- ・鈴木毅彦：東京と関東の地形の成立—地震・火山・古環境とのかかわり—.

12 月・講演会

- ・小堀 昇：地図学の応用.

研究発表会

- ・青木 俊・志村 衛・坪内有沙：宮城県綾町における新規就農者の定着条件について.

- ・ 斎藤 肇・大塚洋二郎：伊豆大島における溶岩の特徴の違い
—噴火した時代と場所に注目して—.
- ・ 高橋孝介：観光ブランドとしての世界遺産—世界遺産宇治上神社を事例に一.
- ・ 小川陽介：コミュニティバスの利用状況と付加サービスの利用実態
—『六万石くるりんバス』を事例に一.
- ・ 塚木達彦：島根県大田市付近における中～大型哺乳動物の分布と行動
および農作物への被害について.
- ・ 鈴木一明・古川雄太：中心商店街の現状と課題
—愛媛県宇和島市・宇和島きさいやロードを事例に一.
- ・ 渡辺 基・江川祐樹：不快指数から見る銚子の気候環境と海陸風との関わり.

2012 年度

6 月・講演会

- ・ 長沼佐枝：人口高齢化にともなう住宅地空間の変質と維持.

12 月・講演会

- ・ 三浦英樹：極地のフィールドワーク—第四紀の南極氷床変動の謎を解く—.
研究発表会
- ・ 正田一真・後野寛子・渡邊智：
愛媛県今治市における地場産食材を使用した学校給食の意義.
- ・ 丸田洋樹：沼田市におけるヒートアイランド現象.
- ・ 高橋幸平：広島県大竹市の犯罪発生分析.
- ・ 川村尚子：南会津町だいくらスキー場開発の背景と土地改変.
- ・ 浪床裕貴：大井川流域における電源開発鉄道の形成とその変遷.
- ・ 添野真広：愛媛県大洲市における中・大型哺乳類の生息状況と被害について.
- ・ 岩間太一：大分県臼杵市の醤油・味噌醸造業の現状.

2013 年度

6 月・講演会

- ・ 中山大地：自然地理“+”情報科学.

12 月・講演会

- ・ 高柳長直：地域ブランドと地理的表示.
研究発表会
- ・ 吉村美咲：鳥取県大山付近における河辺植生とその環境条件.
- ・ 西本修司：函館市本町地区における中心商店街の変容.
- ・ 米長知里：大阪市内の商店街における屋外広告物の色彩について.
- ・ 田所正敏：歴史的町並み保存地区における住民意識.
- ・ 川口拓也・吉田 真：十勝地方における地域ブランド構築へ向けた取り組みの実態.
- ・ 大久保洋祐：新潟県長岡の気候環境について.

2014 年度

6 月・講演会

- ・小泉 諒：変わりゆく東京大都市圏の社会・空間構造—1990 年代以降を対象として—.

12 月・講演会

- ・石原 肇：地理学を地方行政の現場で生かす.
- ・大伴真吾：航空測量業界の仕事と今後の展望について.

研究発表会

- ・高中 亮：香川県北東部におけるイノシシ等による獣害の実態とその対策.
- ・高水 紘：公園利用者の行動特性—福岡市大濠公園を事例に一.
- ・田口 翼：北陸地方の風の特徴—冬期における富山の南風—.
- ・中根敏江・根本崇弘・高橋和人：北海道美瑛町における農地流動の展開と大規模経営農家の経営実態.
- ・中村周平：南房総市千倉町における海成段丘の分布と特徴.
- ・石黒敦志：戦後の岡山県西部における交通機関の変遷と地元の反応—井笠鉄道・井笠鉄道バス沿線の事例—.
- ・小沼 大：北海道中標津町における大型小売店利用者とその利用目的.

2015 年度

6 月・講演会

- ・前杵英明：インダス文明と自然環境.

12 月・講演会

- ・野口泰生：霧ヶ峰の気候景観.

研究発表会

- ・佐藤宏昭：北陸地方の冬の卓越風と気候景観.
- ・前原翔吾：ハイパースペクトラルセンサーを用いた分光反射特性の検証—東京都伊豆大島を例に一.
- ・大塚憲司：重要伝統的建造物群保存地区に対する意識—宮城県村田町村田を例に一.
- ・宇都宮和彦・宮野涼太・諸橋夏海・吉岡大貴：
南島原市における体験型ツーリズムによる地域づくりの展開.
- ・菅原孝太：紀行文や映画などからみる「伊予の小京都」大洲のイメージ.
- ・鈴木岳美・清水駿悟・樋口達也：
徳島県南東部の二次林における沿海部と内陸部での樹種構成の違い.

2016 年度

6 月・講演会

- ・加藤幸治：スイスにおける産業の「棲み分け」.

12 月・講演会

- ・長島弘道：国士舘大学在職 30 年プラスその後.
- ・野口泰生：古き良き時代.

- ・磯谷達宏：地理学教室の 50 年とこれから。
研究発表会
- ・市丸翔太：さぬき市長尾におけるヒートアイランド観測結果.
- ・前平千晶：山梨県甲府市における宝石小売業.
- ・遠藤 慧・岡田真次・佐藤孝樹：
香川県北東部における標高と地質による二次林の樹種構成の違い.
- ・安藤将吾：だいくらスキー場崩壊地の特徴—写真測量による考察—.
- ・立澤大樹・山崎佳奈・佐々木悠人・川崎大輝：広島県世羅町における民宿経営の特徴.
- ・糸賀 輝：地方鉄道と沿線住民のつながり—高松琴平電気鉄道琴平線を例に—.
- ・佐藤正樹：那覇市中心市街地における駐車場の分布.



17. 文学部紀要(地理学関連論文)一覧

人文学会紀要

第1号(1969年3月)

- ・大橋興一：ロシア平原開発過程におけるロシアースラヴ人の動向と森林・河川の影響一.

第2号(1970年3月)

- ・富田芳郎：台湾の郷鎮集落型の成立と分布について.

第3号(1971年3月)

- ・山本正一：東京内湾特に東地区における海苔養殖.

第4号(1972年3月)

- ・岩田孝三：板谷峠における上杉(米沢)藩グラシー(Glacier)の政治地理的研究.
- ・浅井得一：内田寛一著『近世農村の人口地理的研究』.

第5号(1973年3月)

- ・浅沼 操：鎧淵周縁地域における田地割替慣行の地理学的研究.

第6号(1974年3月)

- ・山本正一：明治初期諏訪湖開墾計画の歴史地理学的研究.

第7号(1975年3月)

- ・大橋興一：北氷洋におけるロシア人の探検航海.
- ・岩田孝三：大橋興一著『帝政ロシアのシベリア開発と東立進出過程』.

第8号(1976年3月)

- ・山本正一：岩手県沢内村湯田町野畑村の集落再編移転.

第9号(1977年3月)

- ・大崎 晃：成立発展期の北洋母船式捕鯨.

第10号(1978年3月)

- ・山本正一：集落移転再編.

第11号 (1979年3月)

- ・浅井得一：昭和20年人口調査の分析.

第12号 (1980年3月)

- ・大崎 晃：明治期における神奈川県足柄郡上郡寄村弥勒寺区共有林野利用の諸形態.

第14号 (1982年3月)

- ・大崎 晃：静岡県焼津における産業資本形成期の水産金融.

第15号 (1983年3月)

- ・大崎 晃：焼津における鯉漁業の資本形成過程と漁撈組織
—大戦前における或る経営事例についての考察—.

第16号 (1984年3月)

- ・長島弘道：農村の生活環境整備と集落
—茨城県における田園都市建設事業を事例として—.

第17号 (1985年3月)

- ・大崎 晃：静岡県焼津における産業資本形成期の鯉漁業漁撈組織
—大戦前の或る経営事例からの考察—.

第18号 (1986年3月)

- ・長島弘道：農村資源の管理に関する予備的考察.

第19号 (1987年3月)

- ・野口泰生：Salt Spray : Its Directional Stress on Plants on the Island of Oahu , Hawaii.

第20号 (1988年3月)

- ・太田晃舜：インドシナにおける土地所有変遷過程の政治的地理的考察
—特に農地改革からのアプローチ—.

第21号 (1989年3月)

- ・野口泰生：Observation of Evaporation by Unconventional Methods in Hawaii : Small Cans and Piche Evaporimeters.

別冊第1号 (1989年3月)

- ・太田晃舜：海洋境界帯南海の性格—島嶼の実態と海の領有化—.

第22号 (1990年3月)

- ・大崎 晃：大戦後における焼津鰹漁業経営体の変容と昭和漁業株式会社.
- ・宮口侗迪：『益子町史 第5巻 窯業編』.

第23号 (1991年3月)

- ・長谷川均：サンゴ礁地形判読のための LANDSAT カラー合成画像の検討.

第24号 (1992年3月)

- ・長島弘道：ハンガリーの都市近郊地域における最近の変容—ガーデンを中心として—.

第25号 (1993年3月)

- ・瀬戸玲子：産業大分類別就業者構成比の変化
—1965～1985年の関東地方を中心に三角ダイアグラムを利用した地図作成による考察—.

第26号 (1994年3月)

- ・内田順文：比喩的認識と場所イメージ.

第27号 (1995年3月)

- ・野口泰生：気象官署所在都市の温暖化と気温の永年変化における最暖・最寒値.

第28号 (1996年3月)

- ・長谷川均：分光反射測定 of サンゴ礁環境調査への応用.

第29号 (1996年10月)

- ・瀬戸玲子：台地の灌漑用水路と1965年～1990年の農業土地利用の変化—山梨県徳島堰、群馬県大正用水・群馬用水、栃木県那須用水地域について—.

第30号 (1997年10月)

- ・岡島 建：近代日本の内陸水運に関する研究の動向と課題.

第31号 (1998年10月)

- ・内田順文：中部地方における都市のイメージについて
—観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み—.
- ・長島弘道：首都圏における堆肥の生産と利用.

第32号 (1999年12月)

- ・長谷川均：衛星画像からみた中国ホルチン沙地の風成地形.

- ・野口泰生：長野県中信高原・霧ヶ峰の気候環境
—第二次大戦中の山岳測候所資料と最近の現地観測から—.

第33号 (2000年12月)

- ・磯谷達宏：暖温帯域の常緑広葉自然林における種組成の地域性
—ギャップ・ダイナミクスに対応した群落複合の比較から—.
- ・内田順文：認知地図にもとづく「伊豆」の範囲について.

第34号 (2001年12月)

- ・岡島 建：近代の商工地図とその利用—神奈川県为例を中心に—.
- ・長島弘道：日本における堆肥の供給と需要の動向.

第35号 (2002年12月)

- ・内田順文：映画作品のなかの場所—小津安二郎『東京物語』を読む—.
- ・長谷川均：国士舘大学地理学教室におけるGIS教育について.

第36号 (2003年12月)

- ・磯谷達宏：植生景観の概念と人里における植生景観研究の意義.
- ・野口泰生：都心と郊外との気温差として表現された東京のヒートアイランド現象
—寒冬・暖冬年、冷夏・暑夏年の比較—.

第37号 (2005年3月)

- ・加藤幸治：仙台市の情報サービス業における「地元企業」.
- ・岡島 建：近代都市大垣の発達と河川水運の利用.

第38号 (2005年12月)

- ・内田順文：食材と食習慣の違いからみた日本国内の地域性について.
- ・長島弘道：JAS法による有機農産物認証制度の現状と課題.

第39号 (2007年3月)

- ・野口泰生：北西太平洋の海面水温変動：ENSOおよび高緯度循環指数との関連.
- ・長谷川均・後藤智哉・藤田泰文：国士舘大学地理学教室におけるリモートセンシング教育
について—その2—.

第40号 (2008年3月)

- ・磯谷達宏：日本の植生帯に関する近年の研究—人文科学の関連領域としての展望—.

第43号 ※国士館人文学 第1号 (2011年3月)

- ・磯谷達宏：科学の諸分野で景観概念はどのように使われているか？

第44号 ※国士館人文学 第2号 (2012年3月)

- ・岡島 建：明治期の河川交通政策に関する歴史地理学的考察.
- ・内田順文：国士館大学文学部における「FDに関する教員アンケート」の結果と分析.

第46号 ※国士館人文学 第4号 (2014年3月)

- ・宮地忠幸：山村農業の変容とその存立要因.
- ・野口泰生：Faculty Development (FD) を考える；地理・環境専攻の取り組みと定期試験の「持ち込み」問題.

第48号 ※国士館人文学 第6号 (2016年3月)

- ・内田順文：国士館大学文学部地理・環境専攻における入試成績と入学後の成績との関連.
- ・宮地忠幸：日本の農村における地域づくりの新たな潮流.

18. 卒業生からのメッセージ

地理学教室での学びの精神

市川清士（1990 年度卒業）

国土館大学文学部地理学教室創設 50 周年、おめでとうございます。多くの大学から地理学教室が減ってゆく昨今、このように発展されていることを地理学教室の卒業生の一人として大変誇らしく思います。私も今年で 50 歳、地理学教室と同年と言うことで強い縁を感じずにはられません。

私が在学当時、1986 年から 90 年（バブル絶頂期）の教室スタッフは、大崎 晃先生、長島弘道先生、太田晃舜先生、野口泰生先生、長谷川 均先生の 5 名、決して大きな教室とは言えませんでした。規模には関係なく、深く幅広い学びの場でした。

学友の多くが人文地理学分野を専攻するなか、私は入学時の志そのままに迷わず地形学（サンゴ礁地形）を専攻し、着任早々の情熱あふれる若き長谷川先生のゼミ 2 期生となりました。当時も自然地理学、特に地形学の分野を専攻する学生は少なく、男子 2 名、女子 2 名のわずか 4 名でした。2 週間に 1 度必ず行わなければならない 45 分間のゼミでの発表は、納得のゆくレジメが出来上がらないまま臨まねばならないことも多く、4 名それぞれが様々な厳しさを抱えておりました。若き長谷川先生の言葉には熱き情熱がほとばしり、未熟な私たちには受け止めきれず思い悩むことも少なくありませんでしたが、なんとか一歩でも先生に近づきたい一心が私達をひたすら前へと進ませたのであろうと今では確信しています（長谷川ゼミの多くの後輩たちも同じ思いであると…）。その後、私は大学院へ進学し、教壇に立ち学生諸君と向き合う身になり、立場が変わった今だからこそ、ゼミでの時間が指導の根底に生きていることを日々実感しております。

当時から地理学教室は大変革新的で、今でこそ身近になった PC ですが、大変高価な PC を学生が自由に使うことができました。例えば、当時大卒初任給三か月分を超える機材でのランドサットの画像解析やデータベースの構築などを自分自身で経験できたことが、これが他に先立つ現在の GIS 教育に発展していったのではないのでしょうか。さらに貴重な経験は「実践で学ぶ」、つまり先進技術だけではなく地形測量や気温観測、土地分類図作成などの基礎的な分野にも時間をかけて学べたことです。これは「学問の基礎とは何か」を考える上での大きな指針となっています。

国土館大学地理学教室でのこれらの学びの精神は、第一線で戦う我々の最大にして最強の信頼できる武器となっております。仕事上で「国土館大学の地理学教室出身者は名前が売れている人が多いですよ」との言葉をかけられる度に、ここで学べたことを嬉しく思います。

創設 50 周年によせて、地理学教室の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

いつまでも我々の期待を超え続ける存在であり続けてください。

(株式会社阪神コンサルタンツ)

地理学教室でいただいたこと

佐々木明彦（1992 年度卒業）

私は平成元年の入学で、平成 5 年の卒業生です。平成になって四半世紀以上経ち、昨今は昭和を懐かしんだり振り返ったりするテレビの企画があつたりもします。私は自分の学生時代をつい少し前のことのように感じておりましたが、そうやって考えるとずいぶん前のことになるのだと思わされます。そしてこのたび、国士舘大学地理学教室が創設 50 周年だと聞き、まさに教室の道のりの半分の頃に学生時代を過ごしたのだなぁと振り返ることができました。

国士舘大学地理学教室の先生方はやる気に満ちあふれており、私を含め、ある意味では受験にしくじって国士舘大学にきた我々に対し、卒業するときには国士舘大学で地理学を学んだことに誇りをもてると思ってもらえるように頑張る、とおっしゃる先生もおられました。私は卒業後、都内の私立大学の大学院の修士課程に進学し、またその後は国立大の大学院の博士課程に進学しましたが、国士舘大学地理学教室で学んだことが、行く先々で活用できました。某先生のおっしゃったことは本当でした。図を描く作業ひとつとっても、私は明らかに多くのことを知っておりました。良いカリキュラムをお考えいただいて、本当に感謝しております。また、私たちの学生時代はワープロやパソコンで文書を書くことが普及し始めた頃で、地理学教室では手書きの卒論は受け取らない、ことになっていました。だから、それを見据えて、日々のレポートも「ワープロ原稿」で提出するようにと、たしか 1 年生の終わり頃に言われました。当時のパソコンは底辺機種でも今のように廉価なものではなく、貧乏な学生にとってはオニのような話でした。結局、私はこのときに不承不承ノートパソコンを購入したのですが、思い返すと、地理学教室では学生が自由に使えるパソコンを先生方が整備されておりましたので、私をもっと熱心な学生ならばブツクサ言わなかったのかもしれない。いずれにしても、卒論の頃には不自由なくパソコンを操作するようになっており、先生方の先を見据えた「強制的な指導」はたいへんありがたいことでした。

私は、国士舘大学を卒業してから 11 年後の平成 16 年から国士舘大学で非常勤講師をつとめさせていただいております。上述のように、地理学教室の道のりの半分の頃を学生として過ごし、また、最近 10 年間ほどの地理学教室もみてきました。専任の先生の人数が増えたこともあると思いますが、以前にも増して、魅力的な授業が行われており、学生のみなき

んは大変恵まれていると思います。地理学の卒論を書くことができる学部・学科にいるのに地理学関係の講義が数コマしか開講されていない、という大学がたくさんあります。私が勤めている大学でも気象・気候の研究をしている学生・院生がおりますが、やはり地理学的な素養を持っていないため、私が地理学的な視点をむりやり授けております。学問横断に秀でる地理学の知識は、社会のいろいろなところで役立つと私は確信しており、地理学を学ぶ学生がどんどん出てきてほしいと思っております。そのために、地理学のすばらしさを発信し、体系立てて地理学を学べる国士舘大学地理学教室の良さをこれからもアピールしてください。地理学教室が益々発展することを願っております。

(信州大学)

学生時代の思い出

武田晃一（2000年度卒業）

国士舘大学文学部地理学教室創設 50 周年おめでとうございます。

私は 1997 年 4 月国士舘大学に入学し、鶴川校舎で 2 年、世田谷校舎で 2 年学びました。静岡県に実家があり 2 年次から下宿生活を始めましたが、友人達の溜まり場になる状態を避けようと、当時各校舎まで電車で 20 分ほどの距離にアパートを探し、電車代を浮かすために自転車通学をして鶴川校舎へ続く山を越え、一直線に続く世田谷街道を走り抜けたことが思い出されます。

学生時代の思い出といえば、まず各学年の地理実習があります。各自自分で考えた課題に向けて実際に調べて行くということで、1 年次は渋谷に行き、静岡県には無い大都市の都市構造を学ぶことができました。2 年次からは岡島先生のお世話になり、箱根湯本の宿舎に泊まり、箱根旧街道をとにかく歩いた思い出があります。3 年次は岡山市にて、路線バスのデイリーリズムを調べるため、バスターミナルやバス会社、バス停の終着点に行き、情報や資料収集を行いました。この時は交通費を節約するために、同じゼミ生の仲間と夜行バスで岡山まで行き、また帰りは祖先の墓がある徳島からスカイメイトを利用しました。徳島空港を飛び立つ飛行機に向け滑走路の上から手を振る整備士の姿も思い出されます。卒業論文は地元静岡県の静岡鉄道について題材を求めて取り組み、提出にこぎ着けました。

また、私の大学生活において欠くことのできないものとして、今では NPO 法人を取得している国際ボランティア学生協会（IVUSA）での活動があります。当時は発足して 7 年ほどの大学サークルでした。特に 3 年次・4 年次においては、長期休暇時にインドや韓国で海外ボランティア活動を行ったほか、台湾中部大地震や国内での災害派遣にも出かけました。

1999 年 9 月に発生した台湾中部大地震では、災害発生後すぐに現地でも活動することを決

定し、航空券、隊員、装備をゼロの状態から始めて朝から晩までかけて皆で準備し、発生後 10 日目の出発をすることができました。現地での活動もまた印象的で、ガレキの中に潜り込んだり、全壊・半壊した宅地について必要物品の仕分けや後片付けをしたりしました。テント生活の中での、野犬の遠吠えが夜間の余震を知らせるという通常の生活では考えられない 10 日間でした。地震という大災害を経験した通常の状態ではない台湾の人々が、親日国ということもあってか、活動に入った家を中心に好意的であったことも思い出に残ります。

この活動が後の国内各地での災害派遣のノウハウとなり、IVUSA 拡大の転機となっていたと思います。このサークル活動に携われたことによって、現在でも関係する友人たちとは変わらない付き合いを続けています。

(名鉄観光サービス株式会社)

磯谷ゼミでの思い出と地理学教室創設 50 周年によせて

内山慶之 (2002 年度卒業・2004 年度大学院修士課程修了)

地理学教室創設 50 周年おめでとうございます。

私は、現在、フリーランスで植生調査や植物に関わるあらゆる調査を仕事としております。1999 年の入学から、学部 4 年、大学院修士課程 2 年、研究生として 1 年、合計 7 年間の長い間、地理学教室の先生方にお世話になりました。

私が学部の学生当時、1~2 年は鶴川校舎、3~4 年は世田谷校舎で講義を受けるという形態でした。地理学という学際的な分野に対する興味は、入学前からもっていたので、学生時代の講義を聴くのは楽しく、毎日それなりに充実した日々でした。そんな中、学部 2 年の時に、当時鶴川校舎に研究室を構えていた、磯谷先生の研究室に友人数人と顔を出すようになりました。当時はまったく考えていませんでしたが、これが今現在の仕事につながる重要なきっかけとなりました。鶴川時代の磯谷先生には、雲取山の原生林や伊豆半島の調査に同行させていただき、植生調査の基礎を教えてもらいました。植生調査の現場を直接体験した私は、それ以来、調査が出来るようになるため、意識して植物を覚える努力や、現場で動けるよう、地形図の読み方、GIS 等の勉強をしていました。その延長と積み重ねが、現在の仕事につながってきています。

世田谷校舎に移った 3~4 年時からのゼミは、当然、磯谷ゼミを選択しました。同時のゼミメンバーはやる気があり、積極的で個性的な人が多かった気がします。ゼミメンバー同士の中も良く、磯谷先生を囲んで、下北沢の居酒屋でよく飲み会を開いていました (写真 1)。地理実習は、伊豆半島の弓ヶ浜周辺で行い、ミーティングが終わった夜中まで植物標本を皆

で検索したことが印象に残っています（写真 2）。



写真 1. ゼミ終了後に下北沢で



写真 2. 実習中の作業風景

この頃、私は漠然とですが、大学で学んだことを職業にしたいと考えていたので、どうしたらよいか考えていました。当時は調査会社で植生調査のアルバイトなどもしており、経験も積んでいたのですが、もう少し勉強してみたくなり、当時出来たばかりの大学院に行くことにしました。修士課程の 2 年間は、引き続き磯谷先生をはじめ、地理学教室の先生方の指導を受け、中身の濃い 2 年間を送ることが出来ました。気がつけば、修士課程修了後の研究生時代も含めて、地理学教室の学生として 7 年間の歳月を過ごし、卒業（修了）後の今現在、植生調査を仕事にしていまに至ります。長々と思い出を書き連ねましたが、卒業生の一人として創設 50 周年を迎えられた、地理学教室のさらなるご発展を心からお祈り致します。

（地理環境調査室）

学んだ“ものの見方”

西 菜保美（2004 年度卒業）

地理学教室 50 周年おめでとうございます。私は 2001 年～2005 年に地理学教室でお世話になりました。卒業してからは、出版社で地図を作る仕事をしています。既存の地図商品に対して、「新しい道路の開通」や、「お店ができた」などの情報更新をしたり、新しい地図商品の企画を行ったりしています。日本全国の地図を作っているの、知らない場所の地図商品を担当することもあります。

その都市がどんな特徴をもっているのかを調べ、住んでいる人の行動範囲を想像して最良の掲載範囲を決めたり、どうしたら使いやすい地図になるかを考えて商品の企画を練ったりしています。人によって感覚の違いがあったり、どれが正解というわけではないので、

難しく感じることもあります。やりがいのある仕事です。提案した企画が通らなかつたり、問題にぶつかったりしたとき、時々思い出すことがあります。

“同じ場所でもスケールによって見え方が変わる”

“一つの現象でも見方（角度）を変えることで、さまざまな原因が見えてくる”

これは私が学生時代、卒論を書いていく中で加藤先生から教えていただいた考え方の一つです。卒論では青梅街道沿いに建ち並ぶおよそ 2,000 軒の建物の階数・用途を調べて、都心から郊外にかけて建物の高さが徐々に低くなっていく原因の分析をしました。

はじめは一つしか考えられなかった原因が、スケールを変えてみることで、他にも原因があることが分かりました。物事は、さまざまな角度から見てみることで、新たな発見が見つかることが分かりました。これは私にとって学生時代に得た大きな収穫であり、今の仕事にも活かしています。



写真 3

加藤先生を囲んで

最後に、今後の地理学教室に期待することですが、「地理学」は自然や気象、経済、歴史など、さまざまなジャンルに結び付けて研究することができ、世の中に貢献できる学問だと思います。そして「地図」についても、昨今頻繁に起きている自然災害の調査や対策に大いに役立っており、これからも必要不可欠なツールと言えます。

しかしながら、地図を単に「役に立つ」ツールとしてだけではなく、人々を楽しませるための「ワクワク」するツールという見方も加えていくことで、もっと可能性を広げていけると 생각합니다。

地図をパソコンやスマホで簡単に見ることができて当たり前な若い世代こそ、このようなことについて新しい発想が生まれるのではないのでしょうか。ぜひ授業でもこのような分野についてもとりあげていただき、「地理学」の可能性をもっと広げていただけたらと思います。

(株式会社 昭文社)

日本の農業を成長産業に変えることを目指して

関根 悟 (2011 年度卒業)

表題は、私が国士舘大学地理学教室での大学生活を通して見つけた目標です。現在の会社を選んだ理由の1つであり、卒業論文のテーマを決めた動機でもあります。

私は、もともと中学校の社会科教員になるのが夢で国士舘大学に進学しました。入学した頃は、農業や第1次産業に興味があった訳でなく、実家が営んでいる米生産を嫌々手伝っていました。

そんな嫌いな農業に興味を持ったきっかけの1つは、福島プロジェクトです。福島プロジェクトとは、宮地ゼミが行っている福島県二本松市(旧東和町)西谷地区で取り組む米づくりの取り組みのことです。地元の農家の方々にお世話になりながら、日本の中山間地域農業の現実を直に学ばせていただきました。農業が「食」を支えている根源であること、農家を続けていくことの難しさや喜びなど、現地で伺ったお話はとても貴重なものであり、今の私を支えています。

福島プロジェクトを経験するなかで、それまで嫌いだった実家の農業もまた違って見えてきました。農業を「支えられる産業」でなく、日本を「支える」成長産業に変えたいと、自分自身の中で農業に対する意識が大きく変わったのです。現在、私は青果物卸売会社で働きながら、その目標へ向けて具体的な行動を始めています(いずれは、自らが農業の生産に携わり、百姓として日本農業を支えたいと考えています)。

地理学は、自然現象から社会現象まで幅広く複合的に研究できる学問だと思います。私にとって、もっとも関心をもてた分野が農業地理学でした。農業の理解には、まさに自然から歴史、経済、政治(政策)などさまざまな知識が必要です最後の卒業論文は、何日も大学に泊まり込んで、宮地先生といろいろな議論をしながら作成しました。今改めて読むと、うまくまとまっておらず恥ずかしい限りです。しかし一方で、最後まで卒業論文に取り組み、完成させることが出来たことは、私にとって自信にもなりました。

学生時代に、野外実習やゼミのプロジェクトを通して、「日本農業を成長産業に変える」という目標をもてたことは幸せなことでした。目標の実現へ向けて、社会人となった今も、まだまだ勉強しなくては・勉強したいと思います。国士舘大学地理学教室には、学生に目標を見いだせられるような場を与え続けてほしいと思います。多くの体験や人々との出会いを通して、悩み、挫折しながらも考えて、自分自身の1つの目標を見つけられるような場が、地理学教室であってほしいと願っています。

(東京シティ青果株式会社)

編集後記

本誌は、国土館大学地理学教室創設 50 周年記念事業の一環として取りまとめられたものである。散在する資料類から、どのような内容をどのように取りまとめるのか、暗中模索の思いで作業が大幅に遅れてしまったが、ひとまず形にするところまでこぎつけることができた。まずは、貴重な原稿をお寄せいただいた長島先生、野口先生、そして卒業生の皆様に、厚く御礼申し上げます。

現スタッフの中で最も新参者の私は、いくつもの資料類をめぐりながらこの記念誌の編集作業を進める中で、これまで知らなかった国土館大学地理学教室の歴史的事実をいくつも知ることができた。その時々で、地理学教室を構成するメンバー（教員、職員、そして学生）が、模索を続けながらも真摯に地理学研究、教育に向き合ってきたことを改めて知るとともに、現在の国土館大学地理学教室の末席を汚している私の責任も重いことを再認識した。

本誌のような教室の歴史を残すという仕事においては、まだやりのこしたことがいくつもあると自覚している。地理学教室 50 年を機に、多彩な教室の活動の記録をアーカイブ化していく必要もあるだろう。国土館大学内外において、地理学（教室）を取り巻く環境が大きく変わろうとしている。時流を見極めながらも、地理学の本質を逸脱することなく、その学問的価値を高めるべく努力していく必要がある。新たな一歩を踏み出していくためにも、これまでの足跡を確認するための記録を整理していくことは意義深い。引き続き、この点を心掛けていきたい。

最後に、本誌の編集作業において、資料の整理、データベース化作業を、国土館大学の野本貴士君、吉岡大貴君、伊邊明里さんにお手伝いいただいた。三人の的確な作業のお陰で、編集作業のスピードもあがった。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

（編集担当：宮地忠幸）

国士舘大学地理学教室創設 50 周年記念誌

発行年月日：初 版 2016 年 12 月 17 日

改訂版 2017 年 3 月 19 日

編集・発行：国士舘大学文学部史学地理学科地理・環境専攻（地理学教室）

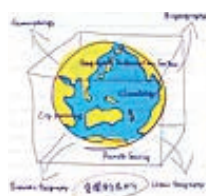
〒154-8551 東京都世田谷区世田谷 4-28-1

電話：03-5481-3231（事務室）／Fax：03-5481-3328

印刷所：株式会社 文成印刷

〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1

電話：03-3322-4141



Department of
**Geography and
Environmental
Studies** since 1966
Kokushikan University